



令和7年度

第43回 四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)

第64回 愛媛県小中学校教頭会研究大会(松山大会)

四 国 の 教 頭

【 研 究 集 録 】



[画像提供:松山市実行委員会]

四国地区小中学校教頭会 愛媛県小中学校教頭会

研究主題

未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり

キーワード <自立・協働・創造>

～夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成～



研究大会の ーコマ



目 次

開 催 要 項	2
主催者挨拶	4
祝 辞	5
愛媛県小中学校教頭会研究主題	7
全体会講演	9
講 演 「アーティスト 石村嘉成のキセキ」 ～発達障がいのがわが子と歩いて～	
第ⅠA研究課題 教育課程に関する課題	21
第ⅠA分科会	22
第ⅠB研究課題 教育課程に関する課題	27
第ⅠB分科会	28
第2研究課題 子供の発達に関する課題	33
第2分科会	34
第3研究課題 教育環境整備に関する課題	39
第3分科会	40
第4研究課題 組織・運営に関する課題	45
第4分科会	46
第5研究課題 教職員の専門性に関する課題	51
第5分科会	52
特別課題分科会	57
講 演 「学校と地域の絆が子どもと地域の未来を創る」 ～これからの学校と地域～	
参加者の声	67
大会を終えて	75
次年度開催県挨拶	77
第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)実行委員会組織	78
編 集 後 記	

第43回 四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会) 第64回 愛媛県小中学校教頭会研究大会(松山大会)

開 催 要 項

- 1 期 日 令和7年11月21日(金)
- 2 会 場 全体会会場 松山市民会館
分科会会場 松山市民会館 松山市総合福祉センター
松山市男女共同参画推進センター(コムズ)
えひめ共済会館
- 3 主 催 四国地区小中学校教頭会 愛媛県小中学校教頭会
- 4 後 援 愛媛県教育委員会 香川県教育委員会 徳島県教育委員会 高知県教育委員会
愛媛県市町教育委員会連合会 松山市 松山市教育委員会
愛媛県小中学校校長会 愛媛県教育研究協議会 公益財団法人愛媛県教育会
愛媛県PTA連合会 松山市小中学校PTA連合会
公益財団法人日本教育公務員弘済会愛媛支部
公益社団法人日本教育会 全国公立学校教頭会
- 5 研究主題

未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり

キーワード <自立・協働・創造>

～ 夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成 ～

6 日 程

9:00 ～ 9:40	分科会打合せ会	〈開会式〉
9:30 ～ 10:00	受 付	(1) 開式の言葉
10:00 ～ 10:20	開 会 行 事	(2) 国歌斉唱
10:30 ～ 12:00	記 念 講 演	(3) 開会挨拶
12:10 ～ 13:30	昼 食・移 動	(4) 祝 辞
13:30 ～ 15:40	分 科 会	(5) 来賓紹介
15:40 ～ 15:50	閉 会 行 事	(6) 閉式の言葉

7 講 演 演 題 「アーティスト 石村嘉成のキセキ」

～ 発達障がいの子と歩んで ～

講 師 石 村 嘉 成 氏・石 村 和 徳 氏

分科会指導助言者・提言者・役員一覧

講 演	講 師・演 題	記 録 者		会 場
	石村 嘉成 氏 ・ 石村 和徳 氏 「アーティスト 石村嘉成のキセキ」 ～発達障がいのがが子と歩んで～	内子町立 立川小学校 安西 純平	西条市立 丹原小学校 長谷川 大三	松山市民会館 大ホール

分科会	指導助言者	司会者	提言者		記録者	会 場
第ⅠA	愛媛県教育委員会 義務教育課 教育指導グループ 指導主事 中野 豪 様	八幡浜市立 保内中学校 伊東 伸也	香美市立 香北中学校 五百蔵 紀子	伊方町立 三崎小学校 加藤 知己	八幡浜市立 川の石小学校 佐々木 治彦	男女共同参画 推進センター (コムズ) 5階 大会議室
第ⅠB	愛媛県教育委員会 義務教育課 教育指導グループ 指導主事 赤松 聖則 様	松山市立 興居島中学校 藤原 和憲	高松市立 亀阜小学校 木田 英登	伊予市立 中山中学校 中塚 秀樹	伊予市立 由並小学校 松本 謙一	総合福祉センター 5階 中会議室
第 2	愛媛県教育委員会 義務教育課 教育指導グループ 指導主事 深野 基嗣 様	篠山小中学校組合立 篠山中学校 岡原 耕一郎	まんのう町立 満濃中学校 岡原 秀和	松野町立 松野西小学校 廣岡 哲也	宇和島市立 吉田中学校 泉 正人	総合福祉センター 1階 大会議室
第 3	愛媛県教育委員会 中予教育事務所教職員課 管理主事・課長 竹内 圭一郎 様	内子町立 大瀬小学校 宇都宮 克憲	吉野川市立 鴨島第一中学校 小泉 博嗣	大洲市立 平小学校 宮田 博和	久万高原町立 畑野川小学校 井上 孝一	男女共同参画 推進センター (コムズ) 5階 会議室5
第 4	松山市教育委員会 学校教育課 指導主幹 富岡 明 様	四国中央市立 三島西中学校 山下 智典	阿南市立 見能林小学校 久龍 和巳	西条市立 丹原西中学校 戸田 行宣	新居浜市立 別子中学校 間部 崇史	松山市民会館 3階 小ホール 会議室
第 5	松山市立小野中学校 校 長 篠原 康展 様	今治市立 立花中学校 八木 春樹	高知市立 江ノ口小学校 岡崎 真理子	上島町立 岩城中学校 中井 将基	上島町立 弓削小学校 志賀 良	えひめ共済会館 4階 豊明

特別課題	講 師・演 題	司会者	記 録 者		会 場
	コムスクえひめ代表理事 元文部科学省CSマイスター 西村 久仁夫 氏 「学校と地域の絆が子どもと地域の未来を創る」 ～これからの学校と地域～	上島町立 岩城小学校 友近 将道	東温市立 川内中学校 大野 小百合	愛南町立 一本松小学校 山本 雅貴	松山市民会館 大ホール

御 挨 拶



四国地区小中学校教頭会

会 長 佐 伯 敬

第43回四国地区小中学校教頭会研究大会（愛媛大会）・第64回愛媛県小中学校教頭会研究大会（松山大会）の開催にあたり、四国各地よりお集まりいただきましたこと、心より感謝申し上げます。ようこそ「いで湯と城と文学のまち」愛媛・松山にお越しくださいました。

本大会の開催にあたりましては、愛媛県教育委員会、松山市及び松山市教育委員会をはじめ、四国各県・各方面の教育関係機関より、格別の御支援をいただきましたことに、心よりお礼申し上げます。

また、開会に際し、愛媛県教育委員会指導部長 小池 達士 様、松山市教育委員会教育長 前田 昌一 様をはじめ、御来賓の皆様方には、公務御多用中にもかかわらず、御臨席を賜り、御祝辞や激励のお言葉をいただきますことに、重ねて厚くお礼を申し上げます。

さて、本大会は、第13期全国統一研究主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」の3年間継続研究の最終年度となります。将来の変化を予測することが困難な時代だからこそ、子供たちに未来を切り拓く力、しなやかに変化に対応する力を育成することが求められています。

本日は、四国各地で積み重ねてこられた研究の成果や課題を共有し、さらに研究を深める貴重な機会となります。どうぞ、積極的な御参加をお願いいたします。また、「四国は一つ」を合言葉に、諸先輩方が紡いでこられた四国地区小中学校教頭会の絆を一層深め、四国の子供たちのよりよい未来のために、実りある大会となりますよう、皆様の御協力をお願いいたします。

最後に、本大会の開催に向けて御尽力くださいました松山市教頭会実行委員会の皆様、心から感謝申し上げます。また、御参会の皆様の御健勝・御活躍を祈念いたしまして、開会の御挨拶とさせていただきます。

祝 辞

愛媛県教育委員会

教育長 高岡 哲也



木々の葉が色づき、美しい秋の景色が楽しめる季節となりました。日本最古といわれる道後温泉や現存12天守の一つである松山城など、歴史と文化が息づく、当地松山に、本日、四国各地の公立小・中学校の教頭先生方が一堂に会し、第43回四国地区小中学校教頭会研究大会（愛媛大会）、第64回愛媛県小中学校教頭会研究大会（松山大会）が盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

御参会の皆様方におかれましては、学校運営の要として、子供たちの健やかな成長と学びの充実のために、創意工夫を凝らした教育活動を牽引いただいておりますことに、敬意を表しますとともに、厚くお礼申し上げます。

さて、ここ松山は、激動の明治時代に、未来を信じ、自分の進むべき道を力強く歩んだ先人、秋山好古・真之兄弟と正岡子規の三人のふるさとであります。司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』にも描かれた彼らは、それぞれ郷土の枠を越えて日本の近代化に貢献しました。彼らが見つめていた「坂の上の雲」は、遠くに見える希望の象徴とされ、その雲を目指して、困難を乗り越え、学び、挑戦し続けることで、未来を切り拓いた彼らのたくましい姿が、心に強く迫ってまいります。

本県では、「未来を切り拓くたくましい子どもたちの育成」を、教育振興方針の一つに掲げ、子供たちが、自分の力で自分の進むべき道を見出し、他者と力を合わせて様々な課題を乗り越えながら資質・能力を身に付けることができるよう、ハード、ソフトの両面から、教育活動の充実に向け、様々な施策を実施しているところです。

今日、少子化、世界情勢の混迷、デジタル技術の急速な発展等により、先行きに対する不確実性がこれまで以上に高まっており、子供たちは激しい変化が止まらない時代を生きることになると言われています。このような時代にあって、子供たちが自分の未来を信じ、自分の人生を力強く切り拓いていくには、ここにお集まりの皆様が、各地域の教育を共に発展させようと力を結集することが重要です。冷静な戦略と情熱をもって子供たちの可能性を引き出し、より高みを目指して教育活動を推進し、ここ四国から世界へと力強く羽ばたこうとする子供たちを育てていただきたいと思えます。

本日は、研究主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」の下、「夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成」をサブテーマとして掲げ、教育課程、子供の発達、教育環境整備、組織・運営、教職員の専門性に関する課題等について協議が行われると伺っております。

どうか、皆様方には、本日の協議を通して「全ての子供たちへのよりよい教育の実現」がより一層推進されるよう、校長の学校経営方針の下、全教職員が互いに連携・協力し、よりよい教育活動を推進する組織づくりに御尽力いただきますようお願いいたします。

結びに、本研究大会の御成功と皆様方の御健勝、御活躍を心から祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

祝 辞

愛媛県松山市長

野 志 克 仁



「^{さび}淋しさもぬくさも冬のはじめ哉」 正岡子規

季節の移り変わりを感じる本日、「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会（愛媛大会）」並びに「第64回愛媛県小中学校教頭会研究大会（松山大会）」が、俳人正岡子規生誕の地、松山で開催されますこと、お祝い申し上げますとともに、四国4県からお集まりの皆様を心から歓迎します。

また、教頭先生方は、日頃から校長先生を補佐し、教職員への指導や助言をはじめ、施設管理や学校内外の連絡調整、子供たちへの指導など、幅広い職務で学校運営に尽くされ、深く敬意を表します。

松山市の将来の都市像は「人、まち、仕事がつながる交流拠点『SETOUCHIまつやま』」です。「人」がつながり、市の内外、世界へと「まち」がつながり、職業や働き方、住む場所を越えて「仕事」でつながり、多くの人と文化が交流する拠点になり、住み続けられるまち、住み続けたいまち、一人ひとりの幸せが実現するまちを目指しています。

特に、教育面では、郷土愛や豊かな心を育むために、松山ゆかりの先人や伝統文化を紹介した、小中学生向けの「ふるさと松山学」を発刊し、夏目漱石と正岡子規が暮らした「愚陀佛庵」を再建するなど、郷土への愛着や誇りを育む教育を推し進めています。近年、子供たちを取り巻く環境は、多様化、複雑化しています。松山市の「まちづくりの理念」のように、「笑顔を大切に『つながる力』で挑戦」し、困難な時代を生きる力を身に付けてほしいと願っています。

さて、現在、教育界に大きな改革の波が押し寄せています。教員の処遇改善や長時間労働を是正するため「教員給与特別措置法」などの改正法が国会で可決、成立し、教職調整額の段階的な引上げのほか、学級担任への手当の加算、若手のサポートや学校内外で調整役を担う「主務教諭」の新設など、具体的な内容が動き出します。

こうした中、「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」を主題に、各校の実践を共有しながら、改革期の教頭の在り方について研究を深めることは、とても意義深く、心強く思います。皆様が、これまでに培われた知識と経験を生かして、新しい時代の学校教育をけん引し、魅力ある学校づくりに一層力を発揮されるよう願っています。そして、本大会の成果が、明るい笑顔でたくましく未来を生きる子供たちの育成につながるよう期待しています。

松山市は、現存12天守の一つである松山城や、約3千年の歴史を誇り、「にっぽんの温泉100選」で2位に選ばれた道後温泉をはじめ、夏目漱石の『坊っちゃん』や司馬遼太郎の『坂の上の雲』など文学作品の舞台やゆかりの地が点在する、歴史と文化が豊かに薫るまちです。情緒あふれる秋の城下町を散策し、疲れを温泉で癒やしていただければ幸いです。

結びに、本大会の御成功と四国地区小中学校教頭会並びに愛媛県小中学校教頭会のますますの御発展、また、お集まりの皆様の御健勝と御活躍をお祈りし、お祝いの言葉とします。

令和7年度 愛媛県小中学校教頭会研究主題

研究主題 「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」(全公教主題)

キーワード <自立・協働・創造>

サブテーマ 夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成

1 第13期全国統一研究主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」(令和5～7年度)

令和の時代となり、現代社会は技術革新やグローバル化の急速な進展、人工知能の進化や普及という、超スマート社会「Society 5.0」の到来が目前に迫っている。学校では、部活動の地域移行や教員不足という社会問題化している解決の難しい課題に直面している。このような将来の予測が困難な時代に、志高く未来を創りだしていくために必要な資質・能力を子供たちに育むことは、学校教育の喫緊の課題である。

一人一人の子供が、このような社会の変化に順応し、未来を切り拓いていくために、自ら主体的に行動し、他者と協働しながら新しいものを生み出し、課題の解決や改善をしていく「生きる力」を、今こそ育てていく必要がある。そのためには、私たち教頭は、社会の変化に対して柔軟にあるいは慎重に、時には迅速に対応していかなければならない。予測困難な時代だからこそ、開かれた教育課程を実現しながら、これまで以上に子供たちにとって魅力ある学校づくりを推進していくことが大切となる。

研究主題に設定した「未来を切り拓く力」とは、子供たちがこの予測困難な時代の進展・変化に対して、適切にかつ積極的に対応する力であり、自ら進んでよりよい社会や幸せな人生を築き上げていく力である。また、「魅力ある学校づくり」とは、学習指導要領前文の「よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創る」という理念を受け、社会に開かれた教育課程の実現に向けて、教頭として「魅力ある学校づくり」に取り組んでいくことである。子供たちが笑顔で学校に通い、安心して教育を受けられることはもちろん、保護者や地域住民の方たちに信頼され魅力を感じていただける「開かれた学校づくり」とともに、教職員にとっても魅力ある学校づくりに取り組まなければならない。

研究主題の実現に向けて、教頭はリーダーシップを発揮するために、職務遂行にあたっての自覚を高め、自らの資質・能力を向上させるべく研究を深めていくことが求められる。教頭としての責務を果たすことができるように、3年間の継続研究を推進していく。

2 第13期の研究の重点

第13期では、子供たちに「未来を切り拓く力を育む」ことができる学校教育を目指し、全国共通研究課題である「教育課程」「子供の発達」「教育環境整備」「組織・運営」「教職員の専門性」「副校長・教頭の職務内容や職務機能」の六つの点から研究を深めていく。

研究主題に関わる「未来を切り拓く」資質や能力は、第12期においても示されており、それを育てていくことを継続する。人との絆を大事にし、自分の個性を生かしながら自ら考え行動し、他者と協働しながら現状を打破する力や、リーダーシップやチームワークを発揮し、新しい価値を生み出す力を育成することを重視していく。

また、「魅力ある学校づくり」では、社会に開かれた教育課程の実現に取り組むだけでなく、新しい時代に向けた持続可能な教育活動・学校運営体制を構築するため、学校における働き方改革の着実な具現化に取り組むことも重要である。

研究を推進する上で、研究主題だけでなく「自立・協働・創造」のキーワードにも関連を図る必要がある。私たちは、子供たち一人一人が多様な個性・能力を伸ばし(自立)、個人や社会の多様性を尊重し、共に支え合い高め合いながら(協働)、新たな価値を創造していく(創造)ことのできる資質・能力の育成を目指している。

そして、令和5年度から令和9年度の第4期教育振興基本計画が閣議決定され、「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」という二つのコンセプトが示された。ここで示された内容は、第13期の研究に結び付けていかなければならないと考える。

3 サブテーマ「夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成」

(1) 【夢と志を持ち】とは

子供が将来目指したい理想や目標を持つなどの「夢」を抱き、よりよい自分やよりよい学級・学校・地域社会を創ろうとする意欲や態度、すなわち「志」を持つことである。同時に、子供

を見守る全ての人の夢と志も指し、子供の成長に関わる学校・家庭・地域が一体となり、「チーム学校」となる願いを込めている。そのためには、「社会に開かれた教育課程」の推進とともに組織マネジメントが鍵となると考える。

(2) 【絆を深めながら可能性に挑戦する子供】とは

人生100年時代における予測困難な変化の激しい社会の中にあっても、輝く未来社会と自分を信じながら、粘り強く可能性に挑戦し続けていく自己実現を目指す子供と捉える。同時に予測困難な場面に対応するためには、自他を信じ共に認め合い、高め合って絆を深め、協働しながら挑戦し続けることが重要となる。

このような子供たちを育成するには、今後一層、学ぶことと社会とのつながりを意識し、知識の質・量の改善に加え、学びの質や深まりを重視した学習を着実に実施していなければならない。また、子供たちに集団への適応や協調を基盤にした社会性や人間性、豊かな心と健やかな体を育てながら、よりよい生き方や考え方を培っていくことが重要であると考え。

4 私たち教頭は

私たち教頭は、「夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供」を育てていくために、教職員の意欲の喚起や資質・能力の向上に力を注ぎ、学校教育の活性化と変革を目指していかなければならない。また、我が国の教育の質を維持、向上し続けるためには、教職を目指す優秀な人財の確保・育成が必要である。そのためには、未来を切り拓く子供たちを育てる教育という仕事の責務と魅力を、我々教職員が適切なワークライフバランスにより目の前の子供たちにしっかりと向き合い、生き生きと働く姿で働きがいを発信していくことも重要である。

5 研究の推進方法

研究の推進に当たっては、引き続き継続性、協働性、関与性の3本の柱（3C）を重視する。

- 継続性—— 教頭会組織に改編があっても、これまでに解明されたことは何か、残された（Continuity）課題は何かを踏まえた問題解決型の研究を継続的に進める。
- 協働性—— 各郡市の全教頭による協働研究を基本とし、教頭としての同僚性を発揮しながら、開かれた関係において協働的に進める。発表内容は、提言者の学校に関わる内容が中心になる場合であっても、組織に属する全員の研究を持ち寄ったり、各校の実践を互いに取り入れたりするなど、組織的に分担、協議し、研究を深めていく。
- 関与性—— 教頭として何をすべきか、どうあるべきか、どう関わるべきかを念頭に置き、（Commitment）各郡市教頭会の課題を明確にし、勤務校での自らの職務遂行や校内研修の課題に関わらせ、そこで得た成果や課題を各郡市教頭会に反映させつつ研究を進める。

6 第13期全国共通研究課題の構造



全体会講演

演題

「アーティスト 石村嘉成のキセキ」 ～発達障がいのわが子と歩んで～



■ 講師

作家
いしむら よしなり
石村 嘉成氏

愛媛県新居浜市在住のアーティスト。

1994年生まれ。2歳で自閉症と診断。自立に向けて、両親の愛情と努力、療育センターでの指導などを受けて成長。

高校は一般受験で入学。高校3年の授業で描いた版画が評価され、創作活動始める。

2013年に第2回新エコールドパリ浮世・絵展ドローイング部門にて優秀賞を受賞。

現在は、個展や講演会等で多くの人に感動と元気を与えている。

作品から石村嘉成の"ことば"を感じてください。



■ 講師

嘉成氏の父
いしむら かずのり
石村 和徳氏

1960年生まれ。愛媛県新居浜市在住。

2歳で自閉症と診断された嘉成氏の子育てに、奥様の有希子氏と夫婦で取り組む。シングルファーザーとなってからは、会社経営の激務と両立させながら、嘉成氏が高校生の時には3年間無遅刻無欠席で一緒に自転車で登下校するなど、苦闘の「療育」を続けた。

現在は、嘉成氏の個展の企画や、「療育」についての講演会にも取り組んでいる。

【全体会講演】 松山市民会館 大ホール

役 割	所 属	氏 名
司 会 者	松山市立高浜小学校	亀岡 修
記 録 者	内子町立立川小学校	安西 純平
	西条市立丹原小学校	長谷川大三

◆ 石村嘉成氏の自己紹介

私は幼い頃、嫌なことがあると泣いて暴れるだけの子供で、2歳のときに「発達に問題がある」と診断されたそうです。母はどうしてよいか分からず困り果てていました。そんな時に、トモニ療育センターの河島先生と出会い、助けていただいたそうです。母は河島先生から、「療育のやり方」を丁寧に教えていただきました。それから母は私に対して、ガラッと変わりました。泣いて暴れていた私に、母は学習する姿勢、言葉や数、周りの人に合わせることや、社会の決まりを守ることを厳しく教えてくれました。

しかし、小学校に入った頃の私は、なかなか席に着くことができず、周りに迷惑を掛けていたそうです。そんな私を心配して、母は毎日、毎時間、教室に付き添ってくれました。「周りの人に迷惑を掛けない人に育ってほしい」「社会のルールを身に付けてほしい」そんな気持ちでいっぱいだったそうです。私の自立のために母は自分の時間を全て使ってくれました。私が小学5年生の時に、母は病気で亡くなりました。母は亡くなる前にこう言っていたそうです。「嘉成は大人になっても人のお世話なしでは生きていけないだろう。だから、人から好かれるようになってほしい。」その言葉を胸に、中学校、高校と進むにつれて私は少しずつ自分のことは自分でできるようになり、だんだん周りに迷惑を掛けないようになっていきました。例えば、学校を休まない、忘れ物をしない、授業中はきちんと席に着き先生の話をしっかり聞く、集中して勉強を頑張るなどです。そんな私に、先生や友達はとてもよくしてくれました。その頃の先生や友達の何人かは、今でも個展の時に欠かさず見に来てくれています。

高校3年生のとき、私は「絵画」という授業を選択しました。これが私の出発点です。美術の先生が「嘉成くんの描く線はとてもいいから、版画をやってみたらどう？」と言ってくれたのです。そこで私は大好きなカマキリやトンボの版画を作りました。その版画をある専門学校の公募展に出品し、入選しました。卒業式の前の日、校長先生から全校生徒の前で賞状をいただき、みんなに褒めてもらいました。あの時の喜びは今でも忘れられません。

高校卒業後は家でコツコツと版画制作を続けました。版画の作業の中には「彫り」という作業があります。彫刻刀を持って、サクサクッと彫っていくのがとても楽しいのです。半年後、コツコツ作った作品がパリのコンクールで優秀賞をいただきました。母の「コツコツ頑張ること」という教えを守ったからだと思います。その頃から私は毎日、絵日記を描くようになりました。右のページには今日あったこと、左のページにはその日一番興味のある動物の絵。寝る前に毎日3時間以上かけて描きます。どこに行く時も日記帳と色鉛筆を持っていき、ホテルでも夜、寝る前に必ず描きます。そして、絵日記の動物をキャンバスに描くようになりました。題材は変わらず「大好きな動物」です。私は幼い頃から動物が大好きな子供でした。母はしつめに厳しかったのですが、大好きな動物に関しては私の好きなことをいっぱいさせてくれました。動物の絵本を読んでくれ、動物園に連れていってくれ、動物番組を観せてくれ、動物といっぱい触れ合わせてくれました。だから今の私は動物を描きたい気持ちであふれています。厳しい環境で生きるラクダ、子育てをするキリン、仲良く泳ぐイルカ……。私の頭の中には描きたい動物が次々と浮かんできます。きっと母が「嘉成の好きな動物をいっぱい描いてね。」と言ってくれているからだだと思います。私の動物の絵を見て、多くの人が「元気が出た。」「優しい気持ちになれた。」「明日からも頑張ろうと思った。」と言ってくれます。そんな言葉を聞くと、私を支えてくれている人たちに恩返しできたようで、とてもうれしいです。いつか「自閉症のアーティスト石村嘉成」ではなくて、「アーティスト石村嘉成」と呼ばれるようになりたいです。これからも、力いっぱい頑張ります。どうぞよろしくお願いします。

◆ 石村和徳氏の自己紹介

今日はこのような場でお話しさせていただける機会をいただき、本当にありがたく思っています。実は、この会場は私にとってとても思い出深い場所です。若い頃、山下達郎さんや佐野元春さん、角松敏生さんなど、様々なアーティストのコンサートを見に来た場所で、まさか自分がここで講演をする日が来るとは思っていませんでした。音響のすばらしさでも有名で、達郎さんは、松山にはもっと大きな会館があるにもかかわらず、「音がいいから」と今でも必ずここで公演をされるそうです。そんな会場でお話しできることはとても光栄です。少し余談でしたが、私の中では大切な思い出ですので、お許してください。

息子には、生まれつき重度の自閉症がありました。発達障がいや自閉スペクトラム症という言葉は、今でこそ随分と身近になりましたが、まだ「周りにそういう子はいない」と思われている方もいらっしゃるかもしれません。ですが、今日ここに来てくださっている皆さんは学校の先生方ですので、すでに日々の教育現場の中で、特性のあるお子さんと接しておられると思います。

◆ 文科省の調査

文科省の調査によると、2022年の時点で、通常学級に在籍している子供のうち、学習面または生活面で著しい困難を抱えている、つまり「発達障がいの可能性がある」とされる子供は8.8%と報告されています。これは、あくまで「通常学級にいる子」に限った数字です。ここに、特別支援学級・特別支援学校の子供たちは含まれていません。ある教育委員会主催で講演した際に、その地域のデータを聞くことができました。特別支援学級・特別支援学校に在籍している子は6.2%。これを先ほどの8.8%と単純に足すと15%を超えます。しかもこれは専門家が診断した数字ではなく、学校の教職員の方々が現場で評価した数字です。私は、実態としてはもっと多いのではないかと思っています。例えば、勉強はできるけれど、コミュニケーションが極端に苦手で、大学に入ってから引きこもりになってしまった方も知っています。そういう子はこの数字に表れていません。そう考えると、特性のある子は20%近いのではないかと感じます。つまり、5人に1人は何らかの困り事を抱えている時代なのだと思います。

こうした現実の中で、日々子供と向き合っておられる先生方に、今日は私の体験も交えながら少しお話しをさせていただければと思います。

◆ 不登校の増加と社会の変化

別の地域で講演したときには、その市では小中学生が6,300人いて、そのうち不登校が400人だと教えていただきました。2年前は300人だったそうで、増え方が異常だと言えます。400人というと、15人に1人。1クラス30人なら、2人は不登校という計算になります。さらに、全国ニュースでも「高校生の11人に1人が通信制高校に通っている」という報道がありました。通信制が良い悪いという話ではありません。ただ、学校という場所は「勉強だけをするための場所」ではなく、人間関係・距離感・協調・葛藤の中で育つ「社会の縮図」です。そこを経験しないまま大人になったとき、社会に出てから苦労するのではないかと私は心配しています。

私は小さな会社をしていますが、最近の新入社員の教育について、管理職や他の経営者から「とにかく難しい」という声を聞くことが増えました。「見て覚えろ」というのは、もう通用しない時代です。丁寧に教えようとしても、「そんなの無理」と辞めてしまったり、逆に説明を省くと「何も教えてくれない」と言われたりします。これはもう、個人の問題ではなく、社会全体の構造の問題だと私は感じています。

◆ 「決定権が子供側にある」時代へ

最近、教育現場でよく聞くのは、学校における、最近よく耳にするコンプライアンス・ハラスメントといった決定権が子供、あるいはその親にあるかもしれないという状況です。先生が何か注意しようとしても、親の反応を想像するとなかなか言えない。結果として、"普通の家庭の普通の子"がまともな教育を受けられなくなる。これが最大の問題ではないかと思っています。

2023年、県美術館で展覧会をさせていただき、55,000人もの方に来ていただきました。郷土作家としては最高記録だったそうで、本当にありがたいことでした。休日には息子と会場に行き、サイン会を行うことがあります。30人、50人と並んでくださる方々に、私は「よかったら本人と写真もどうですか？」と声を掛けます。すると最近よく見かけるのが、「どうする？どうする？」と子供に聞いて決めさせようとするお母さんです。私が聞いているのはお母さんなのに、子供に振る。その子は恥ずかしくて逃げ回ってしまい、結局時間が掛かる。また、子供が転ばないようにと、前の石ころを取り除いていくような子育てをする傾向にもある。その結果、子供は自分で決める力、責任を持つ力が育たなくなります。もちろん、これはあくまで私の印象ではありますが、最近こうした傾向は確実に増えているように感じます。先生方も、心当たりがあるのではないのでしょうか。

◆ 「発達障がい」について

発達障がいにはいろいろな種類がありますが、一般的には大きく三つに分類されます。外から見えにくい特徴があるため、理解しづらい現状があります。ただ、今日はそれぞれの特性をどう強みに変えていくかという視点で話したいと思います。

まずADHDについてです。人の話に集中しにくい、考えずに行動してしまう、といった特徴があります。要するに、多動・衝動性・不注意が見られるわけです。でもこれも、見方を変えれば行動力がある、発想力が豊かであるという強みにもつながります。多くのことに興味を持つからこそ、新しいアイデアも生まれるわけです。

有名な例でいうと、楽天の三木谷社長が日経新聞出版の『ファーストペンギン』という本の中で、自身にADHDの特性があると語っています。その特性があったからこそ、あのような新しい事業を次々に生み出せた、と肯定的に受け止めておられます。このような特性は、経営者の方によく見られるとも感じています。

次に、学習障がい（LD）です。読み書きや計算など、特定の分野の習得が困難になる障がいを指します。知的な遅れはないのに、特定の分野だけが極端に難しい場合です。ハリウッド俳優のトム・クルーズさんが、自身にLDがあると公表していますが、彼の場合は卓越した身体能力や表現力で現在のパフォーマンスを発揮されています。決して弱みになってはいない典型的な例です。

三つ目に、私の息子にも当てはまる自閉スペクトラム症、ASDです。空気が読みにくい、コミュニケーションが苦手、予定の変更が難しい、特定の物事に強いこだわりがある、などの特徴があります。しかし、これは程度の差こそあれ、誰もが持っている特性だと私は思っています。スペクトラムというのは「連続している」という意味で、境界がはっきりしないのと同じです。

ASDの場合、他者から学びにくい、変化を受け入れにくいなどの課題はありますが、裏を返せば、人に惑わされずにコツコツ取り組む力があるとも言えます。特に本人が興味を持っている分野に関しては、非常に高い集中力を発揮します。また、感覚の過敏さによってパニックを起こすこともありますが、逆にその感覚の鋭さを生かして、匂いの微妙な違いを識別したり、音のわずかな違いを聞き分けられたりすることもあります。そういった特性は、例えば開発や検査の分

野では大きな力になります。ただし、これらの能力が自然に出てくるわけではありません。適切な療育や教育があってこそ、後から能力として花開くものです。せっかくの力を生かせないまま大人になってしまうことが多い現状に、私はとても残念さを感じています。

学校現場の先生方からは、「子供の数は減っているのに、発達障がいと言われる子供は増えている」とよく聞きます。ただ私は、人間のDNAに刻まれた特性が、数十年で大きく変わるとは思えません。昔から一定の割合で存在していたはずです。増えているように見えるのは、診断の機会が増え、社会に概念が浸透したため、数字として表に出るようになった、それだけのことだと思います。

◆ 昔は「社会で子供を育てていた」

私が子供の頃、昭和の時代は、社会全体で子育てがされていました。地域のおじさん、おばさん、知らない大人にもしょっちゅう怒られました。「怒られた」というより、今思えば「育ててもらっていた」んですね。

私は新居浜で育ちました。新居浜は住友の工場もあり、関連の鉄工所など、街にはたくさん大人がいました。日曜日に日が暮れても遊んでいると、「お前ら、いつまで遊ぶんぞ。暗いんやけん、早よ帰れ！」と単車で来たおじさんに怒られました。次の週も似たようなことをしていたら、今度は別のおじさんに怒られる。そんな地域の関わりの中で、周囲の様子をうかがう力、察する力、社会性を自然に身に付けていったと思います。でも、今は、他の子を叱ることなんてほとんどありません。学校の先生も叱りづらい。結果として、叱るのは親だけになります。

ところが、親自身も先ほどのように石ころを取り除くような内向きの子育てをしてしまいがちです。判断力や危機管理能力といったものが十分育たず、不登校につながるケースもあります。

学校は、本来、自動車運転でいえば「路上教習」みたいな場所だと私は思っています。家庭という“教習所”で基本を学び、学校では実際の社会の中でそれを試す場所。そこで問題があれば家庭に持ち帰って修正し、また学校で試す。その繰り返しです。だから、私たちは息子を通常学級に行かせました。優秀な子、苦手な子、足が速い子、遅い子、いろんな子がいる。その多様な環境でこそ、子供は関係の作り方を学びます。

「学校がしんどかったら行かなくていいよ」と言ってしまう親も増えています。ただ、そういう親を育てたのは私たちの世代かもしれません。私は今年65歳になりますが、私たちの若い頃は社会全体が豊かになり、親が子供の進路を支えられる状況が続きました。浪人も普通で、親が支援してくれた。そういう環境の延長線上で、“守りすぎる子育て”につながった面もあるのではないかと、最近よく感じています。

◆ 息子の誕生

1994年、爽やかな日差しの中、待ちに待ったわが子が誕生しました。（写真を提示しながら）家族や親戚みんなに愛されて、息子にとってはとても恵まれた環境でした。赤ちゃんの頃の発達も順調で、1歳になる前には発語もありました。例えば、冷蔵庫の前で「マンマ」と口をパクパクしたり、私が「こんにちは」と挨拶すると、息子もニコっと笑ったりしながら、腰を深く曲げて「こんにちは」と返してくれる。「人間って、こうやってコミュニケーションを覚えていくんだな」と、発見と感動の連続で、初めての子育てを楽しんでいました。私の顔を見て、よく笑ってくれていました。これは「お食い初め」のときの写真です。100日を迎えて、赤い鯛を食べさせる儀式です。ただ、この写真ではあまり笑っておらず、「あれ？」と思ったのを覚えています。赤ちゃん雑誌で「赤ちゃんは黒い斑点に反応する」という記事を読んだものですから、自分の顔に

黒い斑点を描いて息子をあやしていました。家の中では、とにかく息子とよく関わりながら育てていたことを、写真を見て改めて感じます。

息子の1歳の誕生日は、両家の祖父母も集まって、家でお祝いをしました。四国では「一升餅」を背負わせる習慣があります。1.8kgもある餅を背負わせるのですが、息子も頑張っていました。カメラを見つめるこのかわいらしい表情。発達の定型といわれる「〇か月でこれができる」といった項目は、全て順調にクリアしていました。本当に何の問題もなく順調に育っている・・・、そう思っていました。

ところが、1歳2か月頃からです。それまで少し話していた単語が、全て消えてしまいました。こちらのまねもしなくなる。呼んでも振り向かない。視線も合わない。多動が増える。遊びが発展せず、ボール投げのやり取りも嫌う。特定の建物に入ろうとすると大泣きする。散歩コースが違うだけでパニックになる。後から知ったのですが、これを「折れ線型自閉症」と呼ぶらしく、一度獲得していた言語・模倣・愛着行動などが全て消失してしまう重いタイプだそうです。何が起きているのか、親としては全く分かりません。「明らかに何かおかしい」と思い、1歳半頃、行政に相談に行きました。保健センター、親子サークル、今でいう発達支援センターのような場所にも、繰り返し相談しました。ですが、どこに行っても返ってくる言葉は同じです。「まだ小さいので、様子を見ましょう。」・・・。

私は今、全国で講演をしています。どこの保護者の方からも同じ話を聞きます。これはもう全国共通の返答と言ってもいいでしょう。しかし、この「様子を見ましょう。」という言葉が、どれほど罪深いか。何人も育てた経験がないので親は、子育てに関して素人だと思っています。だからこそ、専門家に相談する。行政の窓口に行けば、毎日多くの相談を受けている人たちがいて、専門的な知識を持っているのだろう、そう信じて相談します。ところが返ってくるのは「様子を見ましょう。」です。それをなりわいとしている人に「様子を見ましょう。」と言われると大丈夫なんだと思ってしまう。でも実際、その裏には「何の確証もない」のです。

そしてそれ以上に問題なのは――。親の“危機感”を奪ってしまうこと。それによって、発達障がいの子にとって一番大切な早期療育のチャンスが奪われます。幼児期は、脳が一番育つ、本当に大事な時期です。その時期に「様子を見ていいんだ。」と思わされてしまうことで、親は動けなくなる。そのまま3歳、4歳になり、就園し、小学校に入り…。そこからようやく「おかしい」と気付いた頃には、時間が大きく失われています。これが今の行政の「不作為」が生んでいる現実だと、私は強く感じています。

◆ 専門機関への相談

私は、教育委員会とか、社会福祉協議会、PTA連合会主催で行政からの依頼で講演をさせていただくことが本当に多いので、そこでは必ず「とにかく、親が必死になって相談に来たときに、『まだ小さいから様子を見ましょう。』という言葉だけは絶対に言わないでください。」と言っています。この言葉が、どれだけその子にとって大事な時間を奪ってしまうか。それを強く伝えていきます。たとえば皆さん、病院に行って、小さな小さな「がん」が見つかったとしましょう。そんなときに医者から「まだ小さいから様子を見ましょう。」なんて言われる医者、信用しますか？むしろ、「小さいうちに見付かってよかったですね。一緒に治療を頑張りましょう。」と言ってくれる医者を信頼するはずです。医療の世界ではそれが普通なんです。でも、こと発達障がいに関しては、どうも「様子を見ましょう」と言われがちなんです。驚くことに、今でも松山でもそれが該当します。本当にそれで責任を持って言っている言葉と言えるのか？僕はそう思うのです。だから保護者の方には、冗談半分ですが、「もう集団訴訟でも起こしましょう。」と言うくらいです。

とにかく、時間は解決してくれません。様子を見たって、問題が自然に治るわけではありません。これは僕が強く伝えたいことです。

私も当時、いわゆる「専門家」と言われる人たちにアドバイスされ、様子を見ていました。でも、2歳を過ぎても一向によくならない。むしろ、どんどんひどくなっていきました。家の中は暴れ回って大変でした。そしてやっとの思いで、小児神経科を受診しました。小児神経を専門に見られる医師は本当に少なく、新居浜でも1軒、あっても2軒あるかどうかです。そこで診察を受けて、息子は“自閉症”と診断されました。ただ、そのときに言われたアドバイスといえば、「泣くようなこと、嫌がることをさせずに、とにかくしっかり声掛けして、遊んで、スキンシップを取りなさい。」という、一般的なもののだけでした。でも、我が家では、もともとスキンシップも十分にしていましたし、他の家庭以上に遊んでいたんです。だから、その程度のアドバイスでは息子は変わりませんでした。というか、そんなことでどうかなる状態ではなかったんです。嫌がることを避けていたら、何もできない。何をしても泣くし、大騒ぎするし、呼んでも応じない、遊びにも乗ってこない。そんな息子にどう接したらいいのか、本当に途方に暮れていました。このとき僕は、「もう専門家と言われる人に相談してもダメだな。」と思いました。また、母親は“自閉症”という言葉は初めて聞きましたので、文献を探して読みあさりました。

そこで分かったのは、「これは生まれながらの発達障がいであること」「原因ははっきりしないこと」「特別な治療法は確立していないこと（今でもそうです）」。つまり、医学的に治療法が確立されていないということは、専門家と言われる人の言うことが、本当は全部「間違っているかもしれない」ということです。エビデンスがないんです。「こうしなさい。」と言われても、根拠はないわけです。だから僕たちは思いました。この延長線上に未来はない。常識をひっくり返さないといけない。例えば天然痘や結核のように、昔は死に至る怖い病気でも、人間は知恵で克服してきました。最初はトンチンカンな対応をしていたかもしれませんが。確立されるまでには何百年、何千年とかかった。自閉症も言われ始めてまだ30年、50年とか、その程度です。息子が小さい頃は、今ほど研究も進んでいませんでした。だから、今「常識」と言われていることが、本当に正しいのかも分からない。そんなところから僕らはスタートしました。つまり、ひょっとしたら、今みんなが「障がい」と言っているものは、未来では「能力」として生かされるかもしれない。実際、ビル・ゲイツも、自分には発達特性があると公言しています。文明を切り開いてきた人たちは、そういう特性を持っていたのかもしれない。うまく生かせたとき、それはとんでもない力を生む可能性がある。人間はそうやって進化してきたのかもしれない。

◆ 河島先生との出会い

それからは可能性を求めて、いろんな病院や施設に相談に行くようになりました。誰か一人でもこの障がいについて詳しく知っているんじゃないか、違う見解もあるんじゃないかと思いました。後になってしておけばよかったと後悔しないように、何か適切な療育方法はないのかと、必死になって探しました。障がいのある子供に対しては、療育とは、「その特性に応じて幅広く支援すること、将来の自立を目指すこと」とされています。

トモニ療育センターという施設があることを知りました。そこは、自閉症児の親を優れた療育者として援助する、要するに親を教育するという場所でした。所長である河島先生自身の息子さんが自閉症で河島先生は、小児科の医師をやめ、息子さんの療育に専念され、その経験に基づいたお話をいっぱい聞かせてもらいました。先生の説明の中で、今までと全く違うことを聞きました。自閉症というのは、関わり方の問題ではなくて、当時、情緒の障がいだと言われていました。今から25年ぐらい前は、特別支援学級は、情緒障がい児学級と言われていたと思います。関わり

方の問題ではなく、生まれながらの脳の機能障がいである。だから、徹底した療育を要すること、パニックを恐れず何事も経験させること、使えない脳があるかもしれないけど、使えるのもあるはずなので、その発達のチャンスを与える、そして母親が正しい知識を持って、適切に行う早期療育の必要性があるという説明を受けました。それによって、私の引っ掛かっていたものがなくなり、腑に落ちました。人間の脳は、3歳前後で飛躍的に成長するため、その時期を逃さずに、その時期に療育することが大切で、とにかく早い時期に始めることが必要であると言われました。例えば3歳だったら、3か月で治せるようなことも、15歳まで放っておいたら、5年かけても治せないこともたくさんある。だから、早いうちにと河島先生からお聞きしました。つまり、行政で聞いた、「まだ小さいから様子を見ましょう。」は、どれくらいもったいないことか、どれくらいその子の人生を壊しているのか、本当にすごく罪なことだなと私は感じました。河島先生の療育の成果をうかがって、我が子も信念を持って療育していこうと夫婦で話したことを今でも覚えています。我々は苦難の道を選択しました。そうしないと、この子たちは育たないと思います。親が何でもしてやって、言うことを聞いて、遊んでやるとしましょう。そのことを続けていくと、嫌なこと、やりたくないことをさせようとすると泣いて、暴れる。そうすると、嘉成にとって全て解決するわけです。それから回避できる。泣いたから、暴れたから、嫌だったからといって、何かから免れることはないことを徹底的に我々は教えていきました。そうしないと嫌なことから回避できるという誤学習をしていきます。そうすると大変な大人になってしまうと私は思いました。私たちは、していいこと、してはいけないこと、するべきことを本当に厳しく教えてきました。そうしなければ、今、こうして1時間近く、私の隣で静かに話を聞くこともできないでしょう。厳しい子育てのように聞こえるかもしれませんが、何か特別なことをしてるわけではありません。普通のお子さんたちは自然に学んでいても、スポンジのように吸収して成長します。けれど、この子たちは、一個一個きちんと教えないと分からないのです。でも、やったらできるんです。させてないだけであって、普通の子育てと一緒に思うのです。とにかく普通の子育てを、うちは丁寧にしてきたわけです。普通の子供さんは、いいことも吸収するけれど、不健全なこと、不道德なことも吸収していきやすい。だから、そこで親の役割がものすごく大きい。もちろん学校も大きな役割があると思っています。

◆ 療育センターにて

（映像提示）母親は、黒いバックに山ほどおもちゃを入れています。嘉成にとって、初めてのところはとても苦手です。行ったことのない療育センターに行くのは絶対に嫌だと我々には予想できました。やはり泣きました。でも、つらい、悲しいとは違うんですよ。相手の言っていることが分からない。相手の言葉から、何をしたいのか分からないし、それに加えてやりたくない。嫌だと言いたいけど、それも言えない。だから、逃れようとして暴れていただけなのです。別のことを先生に指示されたときは、何をすることが理解できたものだから挑戦しようとする。取り組もうとする姿勢があるわけです。何をしたらいいのか分からないから泣いて暴れていた。これだけのことです。ここでかわいそうと思って止めたら、この子の人生はここで終わりです。それ以上進まなかったら、この子の人生泣いて暴れて過ごすだけです。逆に、泣いて暴れても取り組ませようとしていたら、その子の人生は開いてきます。

2年半で、1から100まで数字を並べることができるようになりました。一人でちゃんと座り、きちんと課題を見付けて、できるようになりました。これには大きな意味があります。例えば、十進法を覚えて100までできるようになったら、計算を教えることができます。計算を教えることができたなら、お金の計算ができるようになります。ということは、買い物に行くことができま

す。60まで読めるようになり、時計を知ることができます。時間を教えることができます。この子たちに一番難しい、一番不安な先の見通しを教えることができます。いろいろなことを教えることができます。だから、深い意味があるんです。やればできるんですよ。

また、「文字を教えなさい。」とも、河島先生に言われました。小学校に入る2か月前でしたが、言葉が全然しゃべれません。でも、「目も使えるし、手も使えるし、耳も使えるんだから、隣に座らせて、きちんと書いて教えなさい。」と言われました。覚えることによって指示が通ようになる。これは、社会性の第一歩であると我々は勉強させてもらいました。一次的な障がいとして、脳に何らかの障がいがあるとしましょう。それによって、二次的な障がいとして、知恵の遅れ、言葉の遅れ、運動機能の遅れのようなものが出てきます。放っておけば、身の自立はできない、遊べないといった社会性の問題。2番目に、甘え、かんしゃく、わがままといった性格上の問題。3番目に、偏食、虚弱、肥満がち、便秘がちといった症状が出てきます。1番の問題は、未学習にされる、いわゆる教育を受けるチャンスを失うことです。学ぶ姿勢ができていないからチャンスを失う。家できちんと教えないといけないと私は思います。きっちりしつけて、なんとか嘉成は座れるようになりました。母親は、私が育てなければ、この子は生きていけないと強い自覚を持って育てました。「母が変われば子は必ず変わる。母が育てば子は必ず育つ。」と先生から教えてもらいました。この脳の障がいは容易なものではなく、障がい児は育てにくくてゆがみやすい、この子供たちの育児と教育には、「適切さ」と「一貫性」、「継続的」の全てが必要で、しかもそれが徹底的に行われた時に効果が生まれる。学ぼうとしない子の指導法には多くの工夫がいるとも言われました。将来を見据えて子育てをするために、子供の現状を詳細に把握し、理解し、今どう向き合うべきかを考え、共感しながら、知識を持って育てることが必要です。時には厳しさが必要です。だから、座らない息子を厳しく厳しく夜何時間も掛けて取り組みました。親も粘り強くしてきましたけど、この子もそれに応えてきたわけです。同じエネルギーを持って、この子も応えてきたってことなんです。これだけの努力をしたということです。うちのように認知機能の障がいを持っている子供でも、親の愛を分かっているんですよ。だから、こっちが必死の覚悟で、息子に向き合って厳しく育てたらなおのこと、子供も従うようになるということです。普通の理解力がある子供さんだったら、親の愛には絶対気付くはずですよ。こちらがブレずにきちんと接すれば、絶対に子供がグレたりすることは無いでしょう。これは断言して言えます。とにかく嫌がっても、泣いても座らせる。自閉症児の機嫌を取りながらの指導ではいけない。常にこちらがリードする。これは一般的な子育てや教育と一緒にじゃないでしょうか。常にこちらがリードする。普通の教育も譲らないということが大事です。

◆ 母親の記録から

母親の記録を紹介します。『親が障がいに関して無知であると何の方針も立てられず、子供に振り回される毎日を送ることにならなければならない。トモニ療育センターで学ばなかったら、今でも子供の機嫌をバロメーターに、泣けばおんぶにだっこの生活をしていたかもしれない。子供にいろんな経験を積ませる中で突破すると、自由になることを私たちは知った。母と子が真剣に向き合うことによって、子供はより母親を信頼し、母親も子供がますますかわいく思えてくる。嘉成には、健常者の何倍も適切に真剣に関わっていかなければならない。しかし、親子共に努力したがゆえに得られる喜びや感動は何倍もある。』まさにこのとおりであると私は思います。しつけ系って、皆さん御存知でしょうか。本縫いの前に仮縫いをしておく意味です。ここで手を抜くと、きちんと縫えないそうです。このしつけ系の「しつけ」って、子供のしつけと一緒にないかなと思います。子供にきちんと「しつけ」てまっすぐ縫っていく。子供が成長を遂げたら、親

はしつけ系を抜いてあとは自由に羽ばたかせてやればいいのではないかと思います。

◆ 小・中・高校、そしてアーティストへ

息子は、小学校に上がることになり、情緒障がい児学級を勧められました。今で言うところの、特別支援学級です。新居浜には15校の小学校があって、その中の一つが、この学級を設けており、親が送迎して通学するシステムでした。家でどれだけ厳しくしつけや教育ができて、親が準備してやれないのが「集団」です。同世代の集団から受ける影響がものすごく大きく、そこでしか経験できないことがあります。だから、社会に出る前の練習として、集団の中にいさせたい、その中で問題解決をさせたいと思いました。学校での不適応行動というものはその時に解決しなければ将来に持ち越されます。学校は、母親が横について介助するということで通常学級への入学を認められました。ただ、授業を邪魔しないということです。授業の邪魔になるので、声を出して注意ができないわけです。だから、にらみ付けるしかない。そこで、帰宅後は絶対にしてはいけないことを徹底的に教えて次の日学校に行かせました。もし、ここできちんと直さなかったら、社会に出る歳まで、絶対に持ち越されてしまうことになるからです。

母親は、小学校5年の時に、がんで亡くなってしまいました。家内にとっても一番残念だと、悔しかっただろうと思います。私も本当にやりきれない気持ちでした。どうしてこの子の母親を奪うのかと、世の中には神も仏もないなと思いました。でも、ここで私が療育を止めたら、家内にあの世で顔向けもできません。この子が人間らしく生きていくことを、私が閉ざしてしまったら、本当に人間としての尊厳に関わる問題であるだろうと思って、私も厳しく、厳しく子育てをしました。5、6年生では、情緒障がい学級に在籍しました。中学校では、普通学級入学を校長先生にお願いしました。その際、介助の人を手配し、3年間で一人で行けるようにしようという目標を立てました。校長先生も配慮してくださり、3年間同じ先生が担任でした。中学3年で一人で通学できるように計画を立てました。そこで、僕はまだまだみんなと一緒に学ばせたい、集団の中に入れておきたい、決して特別支援学級はいけなとか、特別支援学校がいけなと言っているわけではない。そこにも、もちろん集団があります。でも、その集団は、属性がある集団であって、社会と同じ多様性のある集団と言いたい私は思います。例えば、集団に入ったら、からかわれることや、馬鹿にされるようなこともあるかもしれません。でも、それ以上にメリットもあると思ったので、普通学級に入れてもらいました。高校受験に向けて勉強もさせました。新居浜には県立高校しかないの、どうしても5教科と面接をクリアする必要があります。とにかく0点をとらないように勉強をしました。数学は、文章題は難しいので、計算問題の6問は絶対解けるように練習だけさせました。面接も何百問も想定問題を出して練習しました。その結果、新居浜商業高校が受け入れてくれることになり、3年生で美術を選択しました。商業高校と言ったら、簿記とか情報処理を選択する生徒さんが多い中で、彼は絵画を選択しました。絵画を選択した生徒が1人だったのですが、校長先生の配慮により、開講されることになりました。一対一のゼミ的な授業をしてくださいました。版画作品に取り組むと、愛媛県のデザイン専門学校のデザインコンクールで入選をして、嘉成は初めて卒業式の前日に、舞台の上で、校長先生から賞状をいただきました。それまで自分はみんなと同じことができないと、何となく分かっていたと思うんです。それが初めて人に「すごい。」と言われて、認められる喜びを知りました。それから絵日記を毎日かくようになり、卒業後に自宅で作品作りを始めました。作品をたくさん作り、展覧会を開くと、多くの方が来て、温かい言葉を掛けてくださるようになりました。これが原動力になっているんじゃないかと思います。

息子のような発達障がいの子たちのことを、「障がい」という言葉で表現されますが、これはす

ごく失礼な言い方じゃないか、言い方が世の中の発達障がいの子供たちや大人たちを生きづらくさせているんじゃないかと思います。この子たちは、様々な特性を持って生まれています。生きづらい特性もいっぱいあります。空気を読めなかったり、ネガティブな特性もありますが、しかし、みんなにはない特性も持っています。例えば、息子だったら、すごい記憶力なんです。中学3年間の給食の献立を覚えています。それも献立表のまんま言えるんです。献立表が映像で出てくるのだと思うのですが、このような能力を持っていると言えます。そのような能力が絵の表現に生きているかもしれない。だから、発達障がいと言わずに、「特性発達」という言い方をすればいいのではないかと私は思います。いろいろな人がいていいと思うんです。その多様性があることがすばらしい。だからこそ、イノベーションが起きて、いろんな発想が湧いてくるんじゃないかと思います。学校というのは、ずっと、そういう場所であってほしいと思っています。また、学校に行かないではなくて、学校に行きたいと思う子供が一人でも増え、学校で社会というものを学んで、問題回避ができる場となり、親と学校が連携する機関になっていただきたいと願っています。

◆ おわりに

がんが再発し、入院したときの母親の最後の写真と、病床で書いた手記を紹介させていただきます。（写真提示）亡くなる前の2日ぐらい前です。昏睡状態でしたが、いきなり嘉成を抱き寄せました。嘉成もこれは大事だと思って、そばに寄り添っている様子です。

『自分の病気を知った時に、まず頭の中をよぎったのは、私がもしもの時、この子はどうなるのだろう。社会の中で孤立しないで生きてほしいと、これまで血のにじむような努力を重ね、療育してきて、やっと行動が落ち着き、少しずつ物事が分かりかけてきたのに、私のいない環境の中で、また元の野生児状態に戻ってしまうのではという恐怖でした。自分の病より、そちらの方が怖かった。』（母親の手記）

どうも、御静聴、ありがとうございました。





全体会講演



第 I A 研究課題

○ 教育課程に関する課題

- * 信頼される学校づくりに資する「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価に関すること
- * 教育目標の設定と具現化に関すること
- * 教科横断的な視点に立った資質・能力に関すること
- * 教育課程の実施と学習評価に関すること
- * 幼・保・小・中・高・特別支援学校の連携に関すること
- * 小中一貫教育に関すること
- * 家庭や地域との連携及び協働に関すること



【第 I A 分科会】 男女共同参画推進センター（コムズ） 5 階 大会議室

役 割	所 属	氏 名
指導助言者	愛媛県教育委員会義務教育課教育指導グループ指導主事	中野 豪
提 言 者	香美市立香北中学校	五百蔵紀子
	伊方町立三崎小学校	加藤 知己
司 会 者	八幡浜市立保内中学校	伊東 伸也
記 録 者	八幡浜市立川之石小学校	佐々木治彦

第Ⅰ研究課題 第ⅠA分科会

「教育課程に関する課題」

研究主題 「特色ある学校づくりの推進と教頭の関わり」

—— IB教育でつなぐ学びと地域との連携を通して ——

香美市立香北中学校 五百蔵 紀子

Ⅰ 研究の概要

香美市は高知県の東部に位置し、旧土佐山田町、香北町、物部村が合併して誕生した。本研究の中学校区である香北町は、やなせたかし先生の幼少期の原風景とされる山間の自然豊かな地域である。

香北中学校区には、国際バカロレアプログラム（PYP）認定校である大宮小学校と国内唯一校区制をもつ国際バカロレアプログラム（MYP）認定校である香北中学校がある。香美市では、令和3年度から中学校区ごとに、「小中一貫グランドデザイン」を作成しており、本中学校区では、小中統一の学校教育目標「人間を大切にする ～自分らしく 自分で動き 探究する～」を柱とし、IB教育でつなぐ9年間の学びの実践に取り組んでいる。また、IB機構の認定校の規準として、「学校コミュニティ全体が、プログラムを理解し、責任をもって取り組む」ことを示している。すなわち、教職員、生徒、保護者、地域も一体となりIB教育を推進していくことが求められている。さらに、学習指導要領においても「社会に開かれた教育課程」を基本理念の一つとして挙げており、学校と地域との連携・協働を更に進めていくことが必然である。本校においても、学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールとして学校運営に取り組んでいる。

2 研究の内容

実践内容	教頭としての関わり
(1) 義務教育9年間をつなぐ小中一貫教育 ア 小中一貫グランドデザインを見据えた研究体制、授業改革の組織 イ 中学校区での小中合同研修、研究推進	○ 小中共通の学校教育目標の達成に向けた体制構築、系統的な教育課程の編成 ○ 研修の企画、連絡調整、運営、助言
(2) 小・中・地域との連携、協働 ア 学校運営協議会 イ 地域学校協働本部 ウ 行事等での地域との関わり	○ 組織編制、会の運営、連絡調整 ○ 組織編制、会の運営、連絡調整 コーディネーターとの連携、取組推進 ○ 地域人材、協力団体との連絡調整、運営 情報発信
(3) 成果と課題 ア 成果 イ 今後の課題	○ 成果の情報と課題の確認 ○ 今後の取組について

3 教頭としての今後の課題

- (1) 教員の異動が毎年ある中で、本中学校区の取組の成果や改善策を確実につなぐ仕組みづくり。
- (2) 地域とよりよい連携を図りながら、今後の取組をどう継続的、効果的につないでいくか、また保護者や地域の願いを受け止めながら、地域の教育資源をいかに教育課程に組み入れるか。

第1研究課題 第1 A 分科会

「教育課程に関する課題」

研究主題 「伊方町の良さを生かした、活力ある学校づくりを目指して」

—— 学校間交流・地域人材の活用を通して ——

伊方町立三崎小学校 加藤 知己

1 研究の概要

伊方町では、「ふるさと愛いっぱいの人材（人財）が育つまちづくり」の実現を目指し、八つの教育基本方針を定めている。学校教育の重点施策の一つに、「特色があり活力のある学校づくりの推進」を掲げ、各校で実現に向けて取り組んでいる。しかし、伊方町は人口減少と少子化が進んでおり、町内小・中学校8校全てが小規模校である。少人数での活動となるため、意見の広がりや深まりに欠けるという弱みがあるが、小規模校だからこそ、顔が見える教育や他校との連携を行いやすいという強みがある。また、伊方町の3地域（伊方・瀬戸・三崎）全てに地域学校協働本部が配置されており、学校と地域のつなぎ役としての教育活動への支援体制も充実している。

そこで、この強みを生かしながら、教頭がコーディネーターとなり、次のような取組を行うこととした。

- (1) 教頭会のネットワークを生かしたり、ICTを活用したりして、学校間交流を行う。
- (2) 教頭が地域とのつなぎ役となり、地域人材を活用した学習や活動を取り入れる。

以上のような取組をより一層充実させることで、ふるさと愛いっぱいの児童生徒が育つ活力ある学校づくりができるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

実践内容	教頭としての関わり
(1) 実態把握	
ア アンケート調査の実施	○ 教員アンケートの作成、集計
イ アンケート結果の分析	○ 結果の分析、情報交換
(2) 具体的な取組	
ア 学校間交流（オンライン、行事等）	○ 学校間、地域との連絡調整
イ 地域人材の活用	○ 実践事例の共有
ウ 交流活動のデータや課題の共有	○ 児童生徒、教員の感想の集約、分析
	○ 交流活動のリスト作成と共有データの作成
(3) 成果と課題	
ア 成果	○ 成果と課題の確認
イ 今後の課題	○ 西宇和郡教頭会での情報共有

3 教頭としての今後の課題

- (1) 継続した取組を目指すとともに、教頭の負担軽減を図るために、どのような工夫を行うか。
- (2) 学校間交流や地域との連携を更に進める上で、教頭としてどのような取組が必要か。

<研究協議>

1 質疑応答

(1) 香北中学校の実践について

ア グランドデザイン作成の際にそれぞれの学校の思いを反映したり、作成の時間を確保したりするために、具体的にどのように進めたのか。(愛媛県)

○ 小・中学校の研修主任が中心となり、グランドデザインを昨年度の3学期から相談しながら作成した。

(2) 三崎小学校の実践について

ア 行事等で教頭や先生方がやりがいを感じていると判断した状態を教えてください。(愛媛県)

○ 子供たちが生き生きと活動している様子を見たり、保護者や地域の方の「よかった。」という声を聞いたりすることで感じている。行事の成果や課題をまとめていく際に「大変だったけれどやってよかった。」という感想を持つ教職員が多く、やりがいを感じていると実感している。

2 グループ協議

(1) 特色ある学校づくりの推進と教頭の関わりについて

○ 香北中の小中9年間を通したグランドデザインや教育課程作成は、教員が異動しても継続したり、アップデートしたりすることができる体制づくりが大切である。

○ IB教育を行うために毎年研修が必須である。また、特色ある学校づくりのため、タブレットを文房具の一つとして捉え、保護者や地域、教頭同士の連絡もオンラインで行うなど、ICTに力を入れている。

○ 小中一貫教育だからできる取組であり、メリットも大きいですが、ワークショップ等もあり、ハードな面もある。ワーク・ライフ・バランスとの兼ね合いが心配である。

(2) コミュニティ・スクール(CS)の活用や地域との連携について

○ 教頭が中心となり、地域のキーマンと日程や活動の連絡調整を取ったりしている。児童生徒の減少や学校統合が進む中、地域の協力は欠かせない。全体のコーディネートは教頭、具体的な段取りは学級担任が行うことで互いの負担を軽減する方法を取っている学校もある。

○ CSを活用して公民館や地域と密着した関わりを進めている。防災マップ作りや花植え運動などを行っている。ただ、地域や教職員に温度差を感じることもある。

○ 地域の伝統文化の継承として学習したことを文化祭で発表したり、地域との行事(米作りなど)を行ったりしている。学校で企画するだけではなく、地域の行事に学校が参加する方法もある。ただ、行事の精選は課題である。

○ 学校運営協議会の方と生徒が話し合いの場を持ったり、児童と地域の方で模擬選挙を行ったりしている学校がある。今後、持続可能な方向性を基に話し合いを持つ予定である。

○ 今年度からCSを始めた市では教頭が窓口で進めている。地域とつながる良さがある一方、業務が増え、コーディネートする負担が大きい。

(3) 学校間交流を通して活力ある学校づくりについて

○ 伊方町の地域の小中交流計画を教頭会が横のつながり・連携を活用して進めているのが素晴らしい。ただ、教頭の負担が大きい。子供が少ない現状があり、交流の大切さが理解できるため、どのような方法が効果的なのかを検討し、持続可能なシステムをつくっていく必要がある。

○ 小中連携で生徒指導の研修をよく行っている。距離が離れている学校や、教頭未配置校との連携の難しさを感じている。

○ 5・6年の外国語や課外活動のハードル走や走り幅跳びの陸上など、乗り入れ指導の協力をしていただいている。

<指導助言>

1 小中学校9年間の学びについて

香北中学校は大宮小学校と教育目標を統一し、小中9年間の学びを「連携」ではなく「一貫」してつなぐことで、目標を統合した目指す子供像の明確化、小から中への移行期に係る不安やギャップの軽減、教員間や学校・地域間の相互理解、連携・協働の促進を図っていた。さらに教育活動の系統性や連続性、一貫性を確保することは、論点整理の第1の方向性と重なる部分である。小中連携は、意図的・計画的な取組を進める強い意志と力強く牽引していく存在が必要である。香北中学校は、「授業づくり部会」「魅力ある学校づくり部会」を中心に、教頭が企画や連絡・

調整、運営、助言等を行っていた。幼児教育から小学校教育、そして中学校教育、高等学校での教育について一貫性が求められており、ぜひ幼小中高での子供の成長の過程を意識した取組の充実を図ってほしい。

2 学校運営協議会と地域学校協働本部について

香北中学校では、学校運営協議会と地域学校協働本部が活動推進の両輪となるよう、地域学校協働推進委員が学校と地域をつなぎ、人材や活動をコーディネートする仕組みが確立されていた。その仕組みがうまく機能するよう、教頭がそれぞれの組織の連携を推進し、中心的な存在として活動していた。これは人的環境を生かし、具体的な教育活動を通して、地域社会全体で子供たちを育むという、まさに社会に開かれた教育課程を実現した実践だった。今後も、教頭が率先して地域のキーパーソンと信頼関係を築き、学校と地域のビジョンを共有し、深く持続可能な連携へと発展させてほしい。

3 伊方町のよさを生かした、活力ある学校づくりについて

伊方町の強みと弱みを基に実態把握に努め、その分析から学校間交流や地域人材の活用、交流活動のデータや課題の共有を図る取組を進める事例は、大変貴重な話だった。全教員対象のアンケート結果に基づき、実態把握から課題の明確化、そして具体的な手段の実行へとつながる継続性、協働性、汎用性を基本としたPDCAサイクルを回しているところが特筆すべき点である。例えば、学校間交流での時間確保という悩みに対し、教頭が日程調整や準備の補助を行うことで、学級担任の負担の軽減が図れた。また、地域人材の活用において若手教員の悩みに教頭が寄り添いながらOJTを推進することで、自信を持って仕事に取り組めるよう支援をしている。これらの取組は、小規模校で単学級の多い実態から、行事や活動を複数の教員で進めることができにくい状況を、教頭の関与により克服するものであり、学校教育の質の保証・向上につながっている。

4 ICTの効果的な活用と課題の可視化について

継続的な取組の手立てとして非常に有効であったのが、ICTの効果的な活用である。伊方町の共有フォルダにデータを蓄積し活用したり、現状の課題をお互いに把握し、迅速に連携しながら解決を図ったりする仕組みを構築することで、継続的なPDCAサイクルを回すことができる。さらにICTによる学校間の垣根を越えた新たなコミュニティを形成することで、教員の専門性の向上を図ることもできる。小規模校の多い伊方町の弱みをICTによって強みに変える取組だった。このように、教頭が教員の悩みに寄り添い、学校全体の課題を可視化し、具体的な解決策をともに実行していくことで、学校教育の質は向上していく。

5 ウェルビーイングについて

三崎小学校の発表からは、教頭の取組が教員のウェルビーイングと学校教育の質の向上を両立させることを感じた。教員の声に耳を傾け、そこで得た課題を可視化することで組織的な解決へとつなげていた。教頭は多忙な教員の業務を調整し、若手教員を支援する中で学校全体でのPDCAサイクルを確認したり、機能させたりする中核的な役割も担っている。教頭が実務的な支援だけでなく、その意識や意義を共有し、調整を後押しすることで学校全体の活力が向上し、結果として子供たちの豊かな学びへと還元される。子供たちのウェルビーイングのためには、教師自身のウェルビーイングを高めることに意識を向けることが必要である。職員室の担任である教頭にはリーダーシップを発揮して、教職員のウェルビーイングの向上に向けた配慮をし、自校の教育活動の活性化を図り、子供たちの学びの充実につなげてほしい。

6 まとめ

二つの発表は、いずれも論点整理の第1の方向性である「主体的・対話的で深い学びの実装」に向けた取組だった。今後は第2の方向性である個別の児童生徒に係る教育課程の仕組みといった「多様性の包摂」、第3の方向性である裁量的な時間をはじめ、柔軟な教育課程による余白の創出といった「実現可能性の確保」に向け、更なる実践研究を進めてほしい。今、私たちは学校の働き方改革という課題に直面しており、業務の精選、見直しを学校運営の中で取り組むことが求められている。三崎小の事例ではデータの共有、課題の可視化が挙げられたが、まさに校務DXの一端を担うものであり、業務の効率化につながる。また、学校運営においては学校評価の活用や学校運営協議会の仕組みを活用することも重要であり、香北中のコミュニティ・スクールがそれを実践している。本日の二つの実践事例は、教頭先生方が教育改革の理念を現場で具体化し、教員のウェルビーイングの向上にも貢献するとともに、業務改善やDX推進にもつながる可能性を示してくれた。これからの教育を創造していく上で、教頭のリーダーシップと、学校・家庭・地域が一体となった取組の重要性を改めて認識していただけたら幸いである。

第ⅠA分科会



第ⅠB研究課題

○ 教育課程に関する課題

- * 信頼される学校づくりに資する「社会に開かれた教育課程」の編成・実施・評価に関すること
(カリキュラム・マネジメント)
- * 教育目標の設定と具現化に関すること
- * 教科横断的な視点に立った資質・能力に関すること
- * 教育課程の実施と学習評価に関すること
- * 幼・保・小・中・高・特別支援学校の連携に関すること
- * 小中一貫教育・中高一貫教育に関すること
- * 家庭や地域との連携及び協働に関すること



【第ⅠB分科会】 総合福祉センター5階 中会議室

役 割	所 属	氏 名
指導助言者	愛媛県教育委員会義務教育課教育指導グループ指導主事	赤松 聖則
提 言 者	高松市立亀阜小学校	木田 英登
	伊予市立中山中学校	中塚 秀樹
司 会 者	松山市立興居島中学校	藤原 和憲
記 録 者	伊予市立由並小学校	松本 謙一

第Ⅰ研究課題 第ⅠB分科会

「教育課程に関する課題」

研究主題 「家庭・地域と協働した学校教育活動を推進するための教頭の役割」

—— 学校運営協議会と地域学校協働活動を通して ——

高松市立亀阜小学校 木田 英登

Ⅰ 研究の概要

現行学習指導要領には、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指すことが重要だと示されている。よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、これからの子どもがどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにすればよいのかを、教育課程において明確にしながら、社会との連携及び協働により、その実現を図っていくことが求められている。

本校でも、学校経営方針の重点目標の一つに、「地域と協働の教育活動の推進」を挙げ、地域とともに、子どもの亀阜プライドを育み、みんなでつくる楽しい学校を目指している。子どもたちを取り巻く環境や学校課題が複雑化・多様化している今、学校と地域が子どもの健やかな成長に向けて、対等な立場で連携・協働する必要性を強く感じている。

また、次期学習指導要領に向けた中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会でも、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進、地域への愛着や子どもの主体的な社会参画について議論されている。

そこで、教頭として持続可能な学校と地域の連携・協働の推進と主体的に社会参画する子どもの育成に向けて、どのような実践を行っていく必要があるかを考察するため、本主題を設定した。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) コミュニティ・スクールの取組 ア 学校運営協議会の運営 イ 地域学校協働活動の推進	○ 学校運営協議会の組織と連携 ○ 地域とのネットワークの構築
(2) 本校の具体的な取組 ア 地域を生かした特色ある教育活動 イ 地域と教職員、地域と子どもの懇談会	○ カリキュラムの見直し提案、助言 ○ 地域関係者との連絡・調整
(3) 成果と課題 ア 成果 イ 今後の課題	○ 成果と課題の共有 ○ 今後の取組について

3 教頭としての今後の課題

- (1) 教頭として、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、どのようにカリキュラムの編成、実施、評価に関わるか。
- (2) 主体的に社会参画する子どもの育成に向けて、子どもの地域への思いと地域の思いの共有化を図るとともに、子どもが当事者として成功体験を味わえる教育活動の実現に教頭として何ができるか。

第1研究課題 第1B分科会

「教育課程に関する課題」

研究主題 「家庭・地域との連携及び協働における教頭の役割」

—— 特色ある地域資源の活用や異校種間連携の取組を通して ——

伊予市立中山中学校 中塚 秀樹

1 研究の概要

予測困難な急激な社会の変化と想像もつかない急速な技術革新、今後益々多様化する時代に、学校が抱える課題も複雑化・困難化し、学校の工夫だけでは乗り越えられない現実が迫ってきている。「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、「よりよい教育課程を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、子供たちに必要な資質・能力を育成するための教育内容を明確にしながら、家庭・地域と連携・協働していくことが大切である。

そこで、伊予地区教頭会では、「社会に開かれた教育課程」の実現に向け、児童生徒が社会を生き抜く力を身に付けられるよう、研究の3年目となる今年度も持続可能な体制づくりや家庭・地域との連携推進及び協働に、教頭としてどのように関わっていけばよいのかを考察することで研究を深めたい。そして、その際、昨年度までの取組の課題である、特色ある地域資源の活用や異校種間連携の取組に焦点を当て、本研究を進めていく。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 伊予地区各小・中学校の取組の把握	
ア アンケートの実施による実態把握	○ 調査内容の検討と実態把握
イ 持続可能な体制づくりに関する情報共有	○ 教頭会での実践発表・情報交換
(2) 具体的な取組	
ア 特色ある地域資源を活用した活動の取組	○ 学校・家庭・地域の願いや思いを把握
イ 異校種間連携の取組	○ 特色ある学習活動や行事等の企画・運営
(3) 研究のまとめ	
ア 成果	○ 成果の情報共有と課題の確認
イ 今後の課題	○ 今後の取組について

3 教頭としての今後の課題

- (1) 「社会に開かれた教育課程」を編成、実施、評価するために、教頭としてどのように関わるか。
- (2) 特色ある地域資源を活用するために、教頭としてどのように関わるか。

<研究協議>

1 質疑応答

(1) 地域連携の成功事例と提案の源泉

(徳島県)

ア 様々な地域連携の活動の提案は、学校側と保護者側のどちらから出たのか。

- 提案は地域学校協働活動推進員から「去年よかったから今年もやろう」と発案される事例が多い。教頭は子供たちの思いや学習内容を伝え、地域の人々との間で「つなぎ役」や「根回し」を担っている。

イ 地域と教職員、地域と子供の懇談会について詳しく教えてほしい。

- 地域と教職員の懇談会は、子供たちの思いや学習で助けてほしいことなどを共有する場であり、地域の方が子供たちの学習に参画するきっかけ作りとなっている。

(2) コーディネーターの役割と調整の苦勞

(高知県)

ア 教員以外に学校側でコーディネーター的役割を担う人、地域でつなぎ役を担う人はいるか。

- 2人体制の教頭のどちらか、または両方が必ずつなぎ役を担っており、特にPTA会長がおやじの会の会長も兼任していることが、連携の大きな力になっている。

イ 防災教育を進める上で、地域とどのような関わりを持っているか。

- 地域の消防署、女性消防団、公民館などと連携し、地域一体で「陸の孤島」になり得る状況を想定した防災教育を推進している。

(3) 連携活動における予算と財源

(愛媛県)

ア 活動における「お金の問題」はどのようになっているか。

- 旅費はボランティアで対応している。

イ クラウドファンディングの工夫や苦勞について教えてほしい。

- 市教育委員会と地元の地域を巻き込み、公的機関と民間、学校が協力してクラウドファンディングを実施した。

2 グループ協議

- 地域とのつながりが深くなるほど、連絡調整、書類作成、会計、外部対応といった教頭の窓口業務の負担が極めて大きくなっている。特に小規模校では地域密着が深いことで、地域からの要望が多くなり、教頭の負担が増す傾向がある。
- PTA活動や地域との会合が夜遅く休日に開催されることが多いため、教職員の働き方改革と両立させ、活動を無理なく継続していく、持続可能にする方法の模索が重要である。
- 地域学校協働活動推進員の力量が成果に大きく影響することが確認された。人選の難しさ、常駐の可否、また次のコーディネーターの確保（人選）が課題である。教員OBや、地域の情報に詳しい外部人材の活用がアイデアとして出された。
- 「お金がない」という問題だけでなく、「予算がありすぎると、使わなければならないという教頭の負担が増える」という新たな視点も共有された。
- 地域との協力体制が充実していることで、逆に保護者との関係が希薄になっているという課題も指摘された。
- 環境を生かした地域交流、連携が必要であるが、そのためには地域を知ること、そのための核となる方とどうつながるかが課題となっている。地域との連携が進んでいる学校は、地域と学校双方にメリットがある状態である。
- PTA活動を全員強制的参加を求めるなどにより強く進めていくと、学校から離れていく雰囲気が出てくる心配があり、PTA活動の在り方もこれから大きな課題となる。地域連携についても、地域と子供が関わることで地域が活性化する内容、関わった大人がやりがいを感じる内容が大切である。

- 地域学校協働活動推進員に数年継続して務めてもらえると、計画的に物事が進むメリットがある。子供たちは様々な体験の機会を得ているが、町内会長の「我が学校」という意識が強いことが、学校への関わりや地域の団結力が強いことの背景にあると思われる。
- 地域学校協働活動推進員、学校運営協議会委員との日々の連携を上手に図っていくことが大切である。学校運営協議会では形式的になりがちであるので、交通指導中や読み聞かせの来校時などに連携を図るように心掛けている。

＜指導助言＞

1 コミュニティ・スクール（CS）のよさを生かした特色ある教育活動（提言1より）

提言1からは、CSのよさを最大限に生かしながら、地域を生かした特色ある教育活動を推進されていることが伝わってきた。教頭がつなぎ役として非常に重要な役割を果たしている。CSの全国の導入率は高まっている。第4期教育基本計画に、CSと地域学校協働活動の一体的推進が示されている。亀阜小学校HPの夏の花火大会の取組にも見られるように、おやじの会、PTA、子供会などの多様な組織と学校がつながり合って、地域とともにある学校が定着している。また、学校HPで全ての学校だよりや生徒指導通信などが閲覧できるようになっており、地域に開かれた学校づくりを推進していることが分かる。今後は、CSを含む地域や家庭との連携、協働を促進しつつ、過度な負担が生じないカリキュラム・マネジメントを実現させるにはどうしたらよいかについて、検討していくことが必要である。

2 特色ある地域資源を活用した地域とともにある学校づくりの推進（提言2より）

提言2からは、特色ある地域資源を最大限に活用しながら、地域とともにある学校づくりを伊予地区全体で取り組んでいることが伝わった。各学校では、社会に開かれた教育課程の実現に向け、カリキュラム・マネジメントを工夫していた。カリキュラム・マネジメントの課題としては、その必要性が十分にそしゃくされていない、単元配列表の作成が目的化していることなどが挙げられる。カリキュラム・マネジメントの目的は、カリキュラムを主たる手段としながら、教育目標の達成を目指して、日々の教育活動や授業の質を向上させていくことである。各学校では、教職員がそれぞれの立場で教育目標に迫っている。カリキュラム(学校の実態に基づいた教育課程)を手段とすることで、教職員のベクトルがそろい、効果的に教育目標に迫ることが可能となる。

地域に根差した教育活動を充実させるためには、まず、教頭自身が地域に魅力を感じ、好きになることが大切である。今後とも、人と人とのつながりを軸にしながら、教育活動の質の向上に努めてほしい。

3 実効性のあるPDCAサイクルの構築による教育活動の持続的な推進

PDCAサイクルの目的は教育活動の質の向上であるが、形骸化しがちである。そのため、学校の実態に応じた工夫が必要である。

4 チーム学校による組織的な教育活動の推進

学校は、個業型組織となりがちである。学校が個業型組織からチーム学校に向かうために、「変わる」「見付ける」「つなぐ」の視点を紹介する。「変わる」とは、教員に過度な負担を掛けないという意識を持ちつつ、「教育目標の達成」という視点から日々の教育活動を見直すことである。「見付ける」とは、課題を明らかにすることである。課題は目標と実態のギャップであるため、課題を設定できてこそ、解決への第一歩を踏み出すことができる。「つなぐ」とは、学校教育に関わる人をつなぎ、組織、チームの力を最大限に引き出すことである。

今後とも、各学校においては、教職員相互の信頼関係を大切にしながら、チーム学校で教育活動の充実を図っていただきたい。

第ⅠB分科会



第 2 研 究 課 題

○ 子供の発達に関する課題

- * 確かな学力の確実な定着に関わること
- * 児童生徒の豊かな人間性の育成に関わること
- * 児童生徒の健康・体力の増進に関わること
- * たくましく未来を切り拓く力やこれから求められる資質・能力の育成に関わること
- * その他、児童生徒の発達を支える教育課題に関わること



【第2分科会】 総合福祉センター1階 大会議室

役 割	所 属	氏 名
指導助言者	愛媛県教育委員会義務教育課教育指導グループ指導主事	深野 基嗣
提 言 者	まんのう町立満濃中学校	岡原 秀和
	松野町立松野西小学校	廣岡 哲也
司 会 者	篠山小中学校組合立篠山中学校	岡原耕一郎
記 録 者	宇和島市立吉田中学校	泉 正人

第2研究課題 第2分科会

「子供の発達に関する課題」

研究主題 「自立へ向かう子どもを育てる学校づくり」

—— 子どもに関わる環境や人をつなぐ教頭の役割 ——

まんのう町立満濃中学校 岡原 秀和

1 研究の概要

まんのう町には、こども園6園、小学校6校、中学校1校が設置されている。町学校教育実践指針において、未来を切り拓く子どもを育てる学校づくり（一人ひとりの子どもが安心して楽しく過ごせる学校づくりに努めること、「主体的・対話的で深い学び」に向かう授業づくりを推進すること、学校と家庭と地域が連携して子育てにあたること）を重点目標としている。

年々、児童生徒が抱える課題も多様化しており、多様な他者と協働する様々な活動において合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにするためには、これまで以上に丁寧で細やかな指導や支援が必要不可欠である。そこで、小学校と中学校がつながり、一体となって自立へ向かう教育を実践するためには、教頭の役割が大きな課題であると考え、本主題を設定した。子ども一人ひとりにとって居心地のよい場所や、自分を輝かせる出番をつくるために、教頭として、どこ（学校内外の環境）と、誰（教師・保護者・地域の人など）と、どうつなげていけばよいかについて探る。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 新入生のスムーズな接続 ア 小学6年生の中学校訪問 イ 中学校入学後の新入生情報交換	○ 校則の説明、校舎案内 ○ 小学校との連絡、調整
(2) 生徒の居場所や出番づくり ア 校則の改定、新制服の導入 イ 不登校生徒への対応 ウ 特別な配慮を要する生徒への対応 エ 地域との交流 オ 国際理解教育の推進	○ 生徒企画委員会への参加、指導 ○ 小学校との連絡、調整 ○ 関係教職員、町内機関との連絡、調整 ○ 関係教職員、町内外機関との連絡、調整 ○ 公民館長、担当教職員との連絡、調整 ○ 教職員の強みを生かせる場の設定
(3) 成果と課題 ア 成果 イ 今後の課題	○ 担当教職員との振り返り ○ 教頭会での共有

3 教頭としての今後の課題

- (1) 今後も継続して、生徒が地域で活躍する場を設定したいと考えているが、担当教職員の働き方改革の観点からも配慮しながら、教頭としてどのように仕組みをつくるか。
- (2) 組織としての指導力を向上させるために、教頭としてどのように取り組むか。教職員個人によってばらつきのある意識をそろえる（高める）ために、教頭としてどのように関わるか。

第2研究課題 第2分科会

「子供の発達に関する課題」

研究主題 「教頭の視点による子供のウェルビーイングを支える教育アプローチ」

—— 健康・体力の増進と家庭・地域との連携 ——

松野町立松野西小学校 廣岡 哲也

1 研究の概要

現代の子供たちは、外遊びの減少や教育環境の変化などといった課題に直面し、自己肯定感の低下や失敗への不安を抱える傾向が見られる。北宇和郡でも同様の課題があり、子供たちが安心して挑戦できる環境づくりが求められている。

こうした背景を踏まえ、北宇和郡教頭会では、教頭として学校教育の中で子供たちの心身の健やかな成長を支える取組を推進してきた。WHOが提唱する「健康」の概念と文部科学省が示す「ウェルビーイング」の考え方を基に、体力・健康増進を「身体面」「心情面」「協調性」の三つの視点から総合的に捉え、運動習慣や食生活の改善、非認知能力の育成、仲間との協働活動などを通じて、子供たちの主体性と協調性を育てている。

これらの取組を進めるにあたり、学校間や地域・保護者・関係諸機関との「つながり」を意識し、連携体制の構築と情報共有を図ってきた。各校の実践を共有しながら共通理解を深め、地域資源を活用した学びや活動の調整を行い、学校教育と地域社会の融合を目指している。

このような連携を基盤として、子供たちのウェルビーイング向上に向けて、学校・家庭・地域が一体となった教育活動を推進しながら、研究を進めた。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 北宇和郡児童生徒の実態把握調査 ア アンケートの実施 イ 全国体力・運動能力、運動習慣等調査 質問紙調査の分析	○ 内容の検討と結果の集計・分析 ○ 実態把握と共有及び教育活動への反映 ○ 教職員、家庭や地域への情報発信
(2) 具体的な取組 ア 学校におけるウェルビーイングの育成 イ 家庭とともに育むウェルビーイング ウ 地域と連携したウェルビーイング推進	○ 学習教育活動等の企画・運営のサポート ○ 進捗状況の確認と情報発信 ○ 地域関係者・関係機関との連絡調整
(3) 成果と課題 ア 成果 イ 今後の課題	○ 成果の情報共有と課題の確認 ○ 今後の取組の確認と研究継続推進の構築

3 教頭としての今後の課題

- (1) 家庭や地域との連携を深め、児童生徒の健やかな成長を支える環境づくりを、教頭としてどのように整備・推進していくか。
- (2) 教頭会としての実践事例や成果を共有し、郡全体の学校に広げていくために、教頭としてどのように働き掛けていくか。

<研究協議>

1 質疑応答

(1) 不登校生徒への対応について

ア 不登校傾向の生徒に対し、町内の関係機関との連携は具体的にどのように行っているのか。
(愛媛県)

○ 教育支援センター(適応指導教室)「いくむ」と密に連携している。最後の手段として紹介するのではなく、日常的な選択肢の一つとして紹介し、保護者とも相談しながら活用できるようにしている。指導員の先生方が、行事参加への声掛けや定期テストの別室受験など、個に応じた柔軟な支援を行っている。

(2) 小中連携の実務について

ア 多数の小学校(6校)との情報交換会はどのような形で行っているのか。また、人数も多く、日程調整なども大変だと思うが、どのような工夫をされているのか。
(愛媛県)

○ 3月末(引継ぎ)と6月(入学後のフィードバック)の年2回実施している。教頭は会場設営や環境整備に徹し、担任同士の実質的な情報交換の時間を確保することで、負担感よりも児童生徒理解のメリットを感じられるようにしている。

(3) 挑戦する環境づくりについて

ア 子供たちが挑戦するための土台づくりが大切だという話があったが、具体的にどのような「仲間づくり」や「環境設定」を行っているのか。特に、体を動かすことが苦手な子やおとなしい子をどのように巻き込んでいったのか。
(徳島県)

○ 地域の施設である「I Cスタジアム(アイススケート場)」を活用し、非日常のワクワク感を創出した。苦手な子への配慮としては、「みんなで一緒に転ぶ」「できないことを笑わない」という雰囲気づくりに努めた。また、赤十字の活動発表では、クラスの代表者だけでなく、全員が何かしらの役割を持って発表する場を設けた。小規模校の利点を生かして全員が役割を持つことで心理的安全性を醸成した。

(4) 教員自身のウェルビーイングについて

ア 地域行事への参加などは、教員の負担が増えるという側面もある。教員のウェルビーイングを向上させるために、教頭としてどのようなことを意識されたか。
(徳島県)

○ 私は「子供の成長を目の当たりにすること」こそが、教員にとっての最大の喜びであり、ウェルビーイングにつながると信じている。もちろん、物理的な負担が増えすぎないような配慮は必要である。そこで、教頭が地域との調整役(コーディネーター)となり、教員が全てを抱え込まないようにした。教員は子供と関わることに集中できるようにすることで、参加した教員からは「参加してよかった」との声聞くことができた。

2 グループ協議

(1) 発表事例1

ア 休日の地域行事への参加について

○ 地域行事に子供たちも積極的に参加させたいし、教員にも参加してほしいのだが、休日だから無理は言えない。

○ 休日の地域行事に参加する生徒の比率が高い場合は、思い切って授業日にするという手もある。ただし、行事の目的を明確にし、きちんと年間計画に位置付けなければならない。

イ 子供の主体性と教員の関わり方について

○ 時間がない中で教員が準備しすぎる(テコ入れしすぎる)傾向があるが、子供に作らせ、達成感を味わわせることが自己肯定感につながる。教頭は担当教員にその視点を持つよう助言し、バックアップに徹するべきである。

ウ 若手教員の育成と教頭の役割について

○ 若手教員を育てるために、あえて地域とのつなぎ役を任せ、最後にその教員が賞賛されるようにサポートに徹する。教頭が手柄を取らないようにすることが重要である。

エ 教頭自身の働き方改革について

- 「教頭には働き方改革はないのか」という意見もあったが、教頭自身も休みを取ってリフレッシュすることが、結果として教職員が休みやすい環境を作り、学校全体の活力につながる。

(2) 発表事例 2

ア 地域連携と働き方改革のバランスについて

- 地域が熱心であることは教育活動の助けになる半面、休日の行事や会合への参加が教員の負担（働き方改革との矛盾）になるケースがある。
- 地域の熱量を生かしつつ持続可能にするためには、誰かが窓口となって交通整理を行い、地域連携のバランスを取っていかなければならない。

イ 特別な支援を必要とする子供への関わり方について

- 学校によって課題はさまざまであったが、行政・医療・福祉などの外部機関とどのようにつながり、組織としてどのように動いていくかについて情報交換を行った。

<指導助言>

1 はじめに

四国4県は降水量に違いがあるが、水源という観点で見ると、四国山地に降った雨という共通点がある。四国最大の河川である吉野川は、四国4県に水を供給している。各学校においても、それぞれの環境、人、物が異なっていると思うが、今回の発表が源となり、各学校で教頭先生がチーム学校の中心となって魅力ある学校づくりに取り組んでいただきたい。

2 具体的な実践例について

満濃中学校の実践では、「自立に向かう教育」をテーマに、精神的自立や社会的自立に焦点を当てていた。まず、小学校6年生段階からの丁寧な連携により、生徒理解が深まり、小学校から中学校へのスムーズな接続が図られていた。次に、生徒会活動では、新制服の導入に向けて、生徒が制服変更の必要性を感じ、主体的に考えられるように進めるなど、生徒一人一人が生徒会活動に主体的に参画するように全教職員で心掛けていた。また、地域のボランティア活動を通して、地域の一員であることを自覚させ、その活動が賞賛されることで自己有用感や自己肯定感を高めることにつなげていた。最後に、国際理解教育推進チームを編制し、それぞれの先生の強みを職員会で紹介していた。これは、教職員理解を深めるという点でも効果的であり、同僚性を高めることにつながったと思う。

松野西小学校の実践では、「ウェルビーイングの向上」をテーマに、家庭や地域との連携を図りながら健康や体力の増進に取り組んでいた。そこには、個人が獲得・達成する能力や状態に基づくウェルビーイング（獲得的要素）だけでなく、人とのつながり・関係性に基づくウェルビーイング（協調的要素）を重視する視点（「日本型ウェルビーイング」の視点）が見られた。子供のウェルビーイングには何らかの教員のサポートが寄与していることから、教員に心や時間の余裕がなければ、子供へのサポートは難しくなる。サポートの提供者である教員にもサポートが必要である。本実践では、教頭先生が家庭や地域とのつなぎ役となることで、教員へのサポートを行っていた。

3 教員としての役割と今後の展望

これからの学校は、個に頼るのではなく、組織として、チームとして持てる力を最大限に発揮することが大切になる。そのためには、教員組織の状態というのを見える化することである。そのポイントが二つある。一つ目は、自立性・向上性の促進である。学校の取組を通じた成長と個々の教員の成長が一致していると実感させるようにしたい。二つ目は、同僚性・協働性の促進である。コミュニケーションの活性化や情報共有など、対話型活動の設定が必要である。同僚性は自然に生まれるものではなく、意識して育むものである。

この重要な役割ができるのは、先生方に一番近く、先生方を一番理解している、教頭先生しかない。本日の協議が明日からの実践に生かされ、子供たちへ還元されることを願う。

第2分科会



第 3 研 究 課 題

○ 教育環境整備に関する課題

- * 児童生徒の安心安全に関すること
- * 学校の施設設備に関すること
- * 学校、家庭、地域との連携と協働に関すること
- * 学校規模適正化に関すること
- * 文書事務、経理事務の管理に関すること
- * 教育 DX を推進する取組に関すること



【第3分科会】 男女共同参画推進センター（コムズ）5階 会議室5

役 割	所 属	氏 名
指導助言者	愛媛県教育委員会中予教育事務所教職員課 管理主事・課長	竹内圭一郎
提 言 者	吉野川市立鴨島第一中学校	小泉 博嗣
	大洲市立平小学校	宮田 博和
司 会 者	内子町立大瀬小学校	宇都宮克憲
記 録 者	久万高原町立畑野川小学校	井上 孝一

第3研究課題 第3分科会

「教育環境整備に関する課題」

研究主題 「地域との連携・協働推進に向けた教頭会としての役割」

—— 地域課題の解決に向けた教育環境体制づくり ——

吉野川市立鴨島第一中学校 小泉 博嗣

1 研究の概要

近年、全国的に人口減少と高齢化が進む中、「消滅可能性自治体」という言葉が注目を集めている。吉野川市はその自治体に指定されており、この問題の解決は急務である。地域の持続可能性を高める解決策を考える上で、教育が果たす役割は大きい。学校において、地域に対する愛着や誇りを持ち、将来地域の担い手となる子どもを育む教育は、必要不可欠である。このような教育は、学校だけでなく、地域と連携した教育環境の中で進めることにより、教育効果の高い学びになると考える。学校と地域が連携した教育環境体制づくりは、教頭の役割だと考え、これからも努めていきたい。

本研究では、吉野川市中学校教頭会、吉野川市小中学校教頭会で、これまでの学校と地域が連携した取組を整理し、情報共有を行い、精査する取組を行った。このことにより、各校が地域連携した教育環境体制づくりに向けた指針を見いだすことができた。各校で実践している教育活動の改善に向け、有効な手立てとして生かすことができると考え、本主題を設定し、研究を進めてきた。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 吉野川市中学校教頭会の取組 ア 本市の地域課題の共有 イ 各中学校での取組の情報交換	○ 本市が抱える課題の把握、確認 ○ 各校の取組を情報共有できる体制づくり
(2) 吉野川市小中学校教頭会の取組 ア 学校運営協議会に関する研修 イ 市内共有フォルダの活用	○ 先進的な取組事例から各校の取組の見直し、検討 ○ 地域連携・CS等情報共有フォルダを作成し、資料を活用できる体制づくり
(3) 成果と課題 ア 成果 イ 今後の課題	○ 他校の取組を受けて各校の改善した取組 ○ 必要な情報を容易に入手できる利便性 ○ 小学校教頭会との情報共有、連携の工夫と改善

3 教頭としての今後の課題

- (1) 吉野川市小学校教頭会との情報共有、連携の工夫や改善にどう取り組むか。
- (2) 学校の統合が進み、学校区の広域化による地域とのつながりが希薄化、困難化が懸念される今後、地域と連携した教育環境づくりに向けて、どのような取組が必要となるか。

第3研究課題 第3分科会

「教育環境整備に関する課題」

研究主題 「安心・安全な教育環境の整備と対応の充実を図るための教頭の役割」

—— 大洲市教頭会の取組を通して ——

大洲市立平小学校 宮田 博和

1 研究の概要

大洲市は、平成30年7月豪雨を踏まえて、児童が自助・共助の力を確実に習得できるように、学校防災教育の充実に努めている。

令和6年4月に豊後水道が震源となった地震では、大洲市でも震度5弱が計測された。幸い大きな被害に見舞われなかったが、深夜に起こったこともあり、即時対応や学校施設をはじめ校区内の安全確認が困難であったことが課題として明確になった。さらに、南海トラフ地震が今後30年以内に発生する確率が70%を越えていることや、大洲市が水害の起こりやすい地域であることを踏まえると、即時に適切な対応ができる体制を整えていくことは喫緊の課題である。また、大洲市では、地域住民や保護者が参画する教育活動が多く設けられており、各校で地域に根差した教育が進められている。しかし、来校者の確認や防犯体制については、地域の実情に合わせた対応が必要であり、その対応は、多種多様である。そのため、教頭は赴任時から、地域の実態と危機管理体制を早急に把握する必要がある。

このような課題を踏まえ、各校の実践や対応を生かし、大洲市教頭会としての体制づくりを行うとともに、危機管理マニュアルや対策を共有し、各教頭が安心・安全な教育環境の整備と対応の充実を図る役割を果たすようにしたいと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 大洲市小中学校の取組	
ア 各校の実態把握と課題の共有	○ アンケート調査
イ 危機管理マニュアル大洲市版の作成	○ 市内各校の危機管理マニュアルの精査
ウ 訓練の実施内容の共有	○ 危機管理マニュアル大洲市版及び携帯版作成
エ 各校実践の共有と情報交換	○ 各校での実践の推進と内容の共有
	○ 各種訓練計画のデータバンク化
	○ 地域や関係機関との連携
(2) 成果と課題	
ア 成果	○ 大洲市教頭会での成果と課題の共有
イ 今後の課題	○ 大洲市教頭会における今後の取組

3 教頭としての今後の課題

- (1) 今後も安心・安全な教育環境の整備と対応の充実を図るために大洲市教頭会として持続可能な体制を構築しなければならない。
- (2) 教頭として教職員全員の防災意識を高めるための研修等の在り方を模索していきたい。

<研究協議>

1 質疑応答

(1) 市町の教頭会について

ア 教頭会は年に何回くらい開催しているのか。 (高知県)

○ 徳島県は3回、愛媛県は7回実施している。

(2) 防犯の取組について

ア 保護者名札の紐の色で対応していると発表の中であったが、具体的にどのようなことをしているのか？ (高知県)

○ 保護者は赤、教職員は青というように色分けをしている。学校により様々だが、2、3色で色分けをしている。

イ 保護者の名札の色を変えることの効果やメリットはあるのか。 (高知県)

○ 一目で分かることが最も重要である。外部の人が同じ名札を入手できる可能性もあるが、そうならないように教職員全員で気を付けて見るようにしている。

2 グループ協議

(1) 防災・防犯について

○ 様々な災害に対応できるよう、町内共有のデータバンクを活用し、避難訓練の計画を立てやすくしている。

○ 教員にも内容を伏せて不審者対応の避難訓練を実施したり、プールにボートを浮かべての水難事故の訓練や、発作を起こした場合の対応訓練を実施したりしている学校がある。各校で工夫しながら、実践的な訓練を実施していくことが必要である。

○ 学校の耐震化が進んでおり、校舎倒壊による事故の事例もないことから、運動場への避難訓練を行っていない学校がある。また、海の近くの学校では高台への避難をするなど、立地に応じた避難訓練の方法を工夫している。

○ 学校の階段を色分けし、避難訓練等の際の指示を分かりやすくするなど、施設・設備の工夫や改善を図っていくこともできる。

○ 危機管理マニュアルの概要版を配付したり、職員会で少しずつ共通理解を図ったりするなど、管理職と教員の間で危機管理に対する意識の差が出ないように働き掛けをすることが大切である。

○ 保護者の名札着用を徹底しており、手間は掛かるが保護者の防犯意識を高めることにつながっている。

(2) 地域との連携について

○ 地域の祭りに教職員が参加することが望まれているが、働き方改革もあり、難しい場面がある。祭りの日を登校日にすることで、教職員も参加しやすく、生徒の祭りへの参加も増えるというメリットがあった。

○ 学校運営協議会のメンバー選定に困っている学校がある。また、コミュニティスクールのコーディネーターは重要だが、見付けるのが大変である。

○ 教頭として地域の人材と学校をつないでいくことが大切である。また、学校をオープンにして、保護者や地域の人の訪問機会を増やすようにするなどの働き掛けも地域との連携を強めるためには必要である。

○ 学校の統廃合によって、公民館との関係が希薄になり、協力が得られにくくなっている。地域の文化や歴史がそれぞれ異なっている点も一因となっている。

○ 地域からの厳しい要望があった場合には、教職員を守ることも必要である。

<指導助言>

1 近隣校との連携について

「地域連携」「危機管理」といった内容では、1校で知恵を絞って取り組むより、今回の発表のように近隣の学校とこまめに情報を交換し、目的や課題を共有しながら進めていく方が充実度が大きい。また、1校の取組では限界があり、市内の学校が同一步調で取り組むことで市全体の活性化や成果につながる。同一步調で取り組むメリットとして、①教員が学校を異動してもスムーズに取組を推進できる ②活動内容によっては、子供たちの意見交換や交流の場となる ③日程

を調整し数校合同で実施できる ④学校間ネットワークが広がり、新たな地域人材発掘につながることが挙げられる。また、この取組に管理職が推進組織の指導的立場として積極的に関わることとさまざまなメリットを得られる。

2 危機管理について

防災に係る内容は、教頭が各学校の核となる。ある意味、この危機管理に関する取組は教頭が最も力を発揮すべきところと言える。地域や関係機関との連携も欠かせない。

また、学校において危機的な事態が発生したとき、本当の学校の力が試されると言っても過言ではない。学校における危機管理の目的は三つある。①児童生徒及び教職員の安全を確保すること ②学校と児童生徒・保護者・地域社会との信頼関係を保つこと ③組織的で迅速かつ的確な対応により、学校を安定した状態にすること である。

危機管理には、事件・事故の発生を極力未然に防ぐことを中心にした Risk Management（リスク・マネジメント）と、万が一、事件・事故が発生した場合に、適切かつ迅速に対応し、被害を最小限に抑えることを中心とした Crisis Management（クライシス・マネジメント）がある。

危機管理のプロセスには、①危険の予知・予測 ②未然防止のための危機管理体制の確立に向けた取組 ③危機発生時の対応 ④対応の評価と再発防止に向けた取組 ⑤信頼回復に向けた取組（①②は Risk Management、③～⑤は Crisis Management）がある。危機管理は、条件が変わっても、誰が対応しても同じ答えが出てくるようなものではない。その時々条件に応じて多様に変化しながらよりよい答えを出していく必要がある。

大切なことは「危険を感じるべきところで、危険を感じられる」に尽きる。危機管理は、リスクを知るところから始まり、リスクを知る最も有益な手段は「実際の事事例を知ること」である。最近どのようなことが大きな問題になっているのか、また、それはどうしてそこまで大きな問題になってしまったのかを知ることが大切である。

学校には、児童生徒の安全に関わること、教職員の信頼に関わることなど、さまざまな危険がある。危険を危機にしないために、私たちにできることは、最悪を想定して考えることや事例の研究・情報の入手をすること、また、役割分担をしっかりとすることだと考える。

3 不祥事防止について

「教職員の不祥事」も大きな学校の危機の一つである。不祥事が起きると、児童生徒・保護者・当事者の家族、勤務校、教育全体に大きな影響が生じる。校内研修で具体的な場面を想定して不祥事が起こった場合のシミュレーションを行うのも、教職員一人一人に不祥事を自分事と捉えさせる一つの方法である。防災、防犯と合わせて、子供を守るという思いで、教職員に指導をしていかなければならない。

4 地域連携活動・コミュニティスクールについて

学校、家庭、地域の関係性は、「土」や「風」「木」と捉えることができる。地域に根差し、信頼される学校にするには、地域・保護者の力が必要になる。昨今の学校を取り巻く諸課題は、量、内容の両面から見ても、学校だけで解決することは困難になってきている。「開かれた学校」から広げて、学校が発想を変え、「巻き込もう」「頼ろう」の思いからさまざまな教育活動に参画していただくことが必要になっている。「社会に開かれた教育課程を行うことにより、子供を育てていく」というスタンスにしていくという考え方である。地域学校連携活動やコミュニティスクールは、その役割を連携・協働によって解決するためのツールとしての考え方が大切である。その推進にあたって、教頭の大きな役割は「マネジメント」ということになると思われ、これらの魅力を実感するためにも、管理職のマネジメントは欠かせない。

5 地域連携と学校安全について

令和4年度から第3期学校安全の推進に関する計画期間中であり、その基本的な方向性には、「地域の多様な主体と密接に連携・協働し」「地域の災害リスクを踏まえた実践的な防災教育・訓練を実施」と示されている。危機管理マニュアルや安全学習にもこの方向性を含んでいなければならない。今日の発表にもあったように、生き方を学ぶ安全教育となるよう、教頭としてのマネジメントや、教頭会で情報共有しながらの取組が大切である。

第3分科会



第 4 研 究 課 題

○ 組織・運営に関する課題

- * 学校運営全般に関すること
- * 人材育成や組織力向上に関すること
- * リスク管理や危機管理に関すること
- * 地域連携（コミュニティ・スクールなど）に関すること
- * 異校種連携に関すること
- * その他、組織・運営に関すること



【第4分科会】 松山市民会館 3階小ホール 会議室

役 割	所 属	氏 名
指導助言者	松山市教育委員会学校教育課 指導主幹	富岡 明
提 言 者	阿南市立見能林小学校	久龍 和巳
	西条市立丹原西中学校	戸田 行宣
司 会 者	四国中央市立三島西中学校	山下 智典
記 録 者	新居浜市立別子中学校	間部 崇史

第4研究課題 第4分科会

「組織・運営に関する課題」

研究主題 「魅力ある学校づくりのための幼小連携」

—— 子供の育ちと学びをつなぐ ——

阿南市立見能林小学校 久龍 和巳

1 研究の概要

将来大人になったときに、変化の激しい時代を生き抜かなくてはならない子供のため、一人一人に高い資質・能力をしっかりと育成し、それぞれのウェルビーイングを実現していくことが求められている。

子供は、幼児期に生涯にわたる重要な資質・能力を培う。それを小学校でも更に伸ばしていけるように、阿南市全体で幼小連携の推進に取り組んだ。本校の取組としては、まず、メンター研修を幼小合同で行うことで教員同士がつながった。そして、幼児と小学生の交流を実施し、子供同士をつなげた。また、幼稚園保護者との座談会を行い、保護者ともつながった。さらに、幼児の多様な背景を知るために、市のこども支援課等ともつながった。このように、様々なつながりを通して一人一人の子供の育ちと学びを理解し、幼児教育と小学校教育を円滑に接続することで、子供たちが安心して通い、主体的に自己を発揮できる魅力ある学校づくりを目指した。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 阿南市小学校の取組 ア 夏季研修会の実施 イ 取組アンケートの実施と情報共有	○ 夏季研修会の内容を各校で伝達 ○ アンケートの実施と情報共有
(2) 本校の取組 ア 幼稚園との合同研修会 イ 幼児と児童の交流 ウ 幼稚園保護者との座談会 エ 新入生連絡協議会 オ カリキュラムの作成	○ メンターリーダー・幼稚園との連絡調整 ○ 各幼稚園・本校担任との日程調整 ○ 幼稚園保護者向けの講演・座談会の実施 ○ 関係諸機関との連絡調整・連携 ○ 1年生担任・幼稚園との協議
(3) 成果と課題 ア 成果 イ 今後の課題	○ 幼小連携の重要性の共有 円滑な接続のための連絡調整 ○ 持続的な仕組みづくり 市全体での取組への発展

3 教頭としての今後の課題

- (1) 幼小連携・接続の取組について、持続的に改善・発展させる仕組みにするためにどう取り組むか。
- (2) どの園にいても、どの小学校に行っても同じような幼小連携・接続が保証されるために、阿南市全体としてどう取り組むか。

第4研究課題 第4分科会

「組織・運営に関する課題」

研究主題 「『未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり』を目指した
学校組織の運営と教職員のウェルビーイングの向上」
—— 働きがいがあり、誇りを持って児童生徒に向き合える職場環境の形成 ——

西条市立丹原西中学校 戸田 行宣

1 研究の概要

西条市小中教頭会（小学校24校、中学校10校、合計34校）では、教頭としての資質・能力の向上を目指して、年間を通じて協議や研修を行っている。各小・中学校間で連携を図りながら、教頭として学校の組織・運営に関する課題を明確にし、市教育委員会に指導・助言をいただきながら、研究実践に取り組んでいる。

西条市では、教育基本方針の一つに「特色ある学校づくりの推進と教職員のウェルビーイングの向上」を掲げ、教職員の資質能力の向上を進めるとともに、働きがいがあり、誇りを持って児童生徒に向き合える職場環境の形成を図っている。また、令和6年度からは全ての小・中学校がコミュニティ・スクールになり、学校と地域が連携しながら学校運営に取り組むことを目指している。

市の教育基本方針を具現化するために、各校の現状を踏まえ、魅力ある学校づくりを推進していく上で教頭の役割について研究と実践を行った。特に、教職員一人一人や組織への効果的な働き掛け、そしてコミュニティ・スクールの取組等、具体的な事例や情報を共有しながら研究を深めた。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 西条市教頭会の取組	
ア 教頭会の組織的研究	○ 過年度の成果と課題の分析
イ 教頭会での研修・情報交換	○ 教頭会での実践報告・情報交換
(2) 魅力ある学校づくり（西条市の取組）	
ア 「学びの文化」の醸成	○ 校内体制の構築
イ 「働き方改革」への取組	○ 教職員への指導・助言
ウ 「コミュニティ・スクール」の活用	○ 地域・関係諸機関との連携
(3) 成果と課題	
ア 成果	○ 成果と課題の共有
イ 今後の課題	○ 次年度の計画作成と推進体制の確立

3 教頭としての今後の課題

- (1) 魅力ある学校づくりを推進していくためのPDCAサイクルの確立を図っていくこと。
- (2) 業務改善に継続して取り組み、働きやすさと働きがいの両立を図っていくこと。

<研究協議>

1 質疑応答

(1) 幼小連携について

- ア 持続可能な取組にするためにどのようなことを行っているのか。(愛媛県)
- 続けてほしい内容項目や日付、具体的な内容を記入した「架け橋カリキュラム」を作成した。中でも、教員の交流として継続するとよい参観授業や行事への参加を記入したカリキュラムを残し、次の教頭に引き継ぐことで持続可能な取組にしている。
- イ 阿南市の小中連携について、何か取組があれば教えてほしい。(愛媛県)
- 正直できていない。しかし、夏休みの研修で中学校から声を掛けてもらった。また、人権教育でつながっており、毎年どちらかの学校の授業を参観し、勉強し合っている。

(2) 学び合い学習について

- ア 西条市として、教育委員会からの学びのモデルがあるのか。(愛媛県)
- 学び合い学習のモデルの提示はある。それを各学校でアレンジをして活用している。

(3) コミュニティ・スクール(CS)について

- ア 西条市では昨年度からCSが始まったが、準備期間に取り組んだことは何か。(愛媛県)
- 小学校が一昨年度から、中学校では昨年度から始まった。準備期間中に市内でモデル校を選定して実際に運営を行い、よかったことや課題を各学校で共有して完全実施に備えた。

(4) 業務削減について

- ア 西条市教頭会ではどのような取組があったのか。(愛媛県)
- 第1回西条市教頭会において、教頭業務について、愛媛大学教職大学院と連携して「教頭業務の分散化による教職員のウェルビーイングの向上」という研修を行った。業務削減には直接つながらないかもしれないが、教頭同士の情報交換をすることで、各学校で教頭が行う業務の違いについて理解ができ、教頭業務の整理に役立った。

2 グループ協議

- 学校運営協議会について、推進リーダーや地域コーディネーターの取組が持続可能な学校運営協議会制度を作っていく。地域コーディネーターがいる学校では、CSが効果的に機能している。そのような人材を確保したい。また、地域・学校で人手が足りない場合や困っているとき、互いに協力できる関係をCSで築いておけば、業務量は減らすことができる。
- 地域との連携については、中・小規模の学校が学校運営協議会との結び付きが強い傾向にある。
- いろいろな業務を全て教頭が引き受けるのではなく、教務等の他の教員に業務を割り振り、学校運営の視点を与え、人材育成につなげる。校務分掌でチームを組み、学び合う環境を作る。
- 教員の業務負担の軽減について、管理職が早く帰る姿勢を見せている。早く帰るよう呼び掛けをするのではなく、目標退勤時間を決め仕事の順序を整理するよう促している。
- 学校間連携について、教頭同士が連携して中学校区でブロック研修を行っている。1学期に学習についての情報交換、3学期に小学校の授業公開ならびに中学校の授業についての説明を行っている。県によっては、毎月中学校区の中小校長が集まり連携に向けての話し合いを行い、祭りや文化祭を一緒に行ったり、人権研修を中学校区で行ったりしている。保幼小・小中高連携の要は、教頭が中心となり交流の場を設定することである。
- 業務改善に向け提案してよかった点は、PTA役員をボランティア制に変更したことや、デジタル連絡ツールの全保護者加入を求め、文書配付をデジタル配信に変更したことなどがある。
- 保幼小連携について、県や市町村によって取組が異なる。幼稚園は小学校との結びつきを望んでいる。つなぎ目の連携を大切にして、子供の中にある壁をなくしていく。
- 教頭業務199項目のうち22項目を改善するワークショップを西条市教頭会として行った。興味深い研修で、他市町村にも参考になる。香川や高知の教頭会ではグループに分かれ研究課題に取り組み、レポートを作成している。レポートを主幹教諭や若手教員が参考にするすることで、それぞれのウェルビーイングにつながっている。

<指導助言>

1 はじめに

学校組織の特徴としては、学校の教育目標が漠然としていて不明瞭、構成員の職務上の独立性が高く、職務範囲がとても広いことがある。そこで、学校として重要なことは「組織力」である。人が組織を形づくることによって生み出される個人の力の総和を超えた力（ $1 + 1 + 1 = 3$ より大きい）、これを生み出すのが「組織マネジメント」である。目指すべき学校組織づくりのために「個」の自律性を尊重し、学校が目指すビジョンを共有しつつ、各自の個性・特長を生かした教育実践を創造できる組織づくりが大切になる。本日の二つの提言において、組織マネジメントに関わる教頭の役割として、「校長、教員、地域に対しての関わり」がテーマになっていた。

2 幼小連携について

背景には、少子化、地域コミュニティの弱体化、情報化・グローバル化等による子供に関する課題の多様化・複雑化がある。「小1プロブレム」や「中1ギャップ」など接続期に見られる問題も深刻化している。阿南市の取組では、市全体で共通のカリキュラムの作成を行い、5歳児の「アプローチカリキュラム」（幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿）と1年生の「スタートカリキュラム」を連携させている。また、「架け橋期のカリキュラム」を作成し、めざす子供像、園の活動・学校の単元、大切にしたいこと、子供同士の交流、教員の交流、家庭・地域との連携を盛り込んでいる。交流による効果として、子供同士は 小学校への授業参加、幼稚園への里帰り、幼児から小学生への「憧れ・安心感」、小学生から幼児への「優しさ・責任感」の醸成につながっている。教員同士は、合同研修による相互理解や登校渋り解消など、円滑な接続につながっている。課題解決に向けて幼小の相互理解を第一歩とし、ICT活用や管理職の積極的な後押し、教頭がコーディネーターとして系統性を踏まえたカリキュラムの見直しが必要である。

3 働き方改革について

西条市教頭会として、有効な取組を共有している。学びの文化の醸成として、授業の流れの共通理解、授業のユニバーサルデザイン化、研修主任と連携して指導の「手立て」を明確化し、若手教員とベテラン教員のマッチングを行い、仕事の効率化につなげている。他に、管理職が起案・決裁票へ一言コメントを朱書きしたり、月1回の教職員アンケートを行ったりして職員に対してきめ細やかな対応を行い、職員のウェルビーイングにつなげている。CSを活用することで、教頭同士による事前打ち合わせ、地域コーディネーターとの連絡・調整、CSでの情報共有が図られ、小中両校を核とした地域の環境整備ができており、副次的な効果として、子供が地域への愛着と誇り、当事者意識を持つようになったことが紹介されていた。

4 教頭としてどう関わるか（マネジメント）

校長に対しては、学校の教育目標への深い共感、校長の求める「具体」への理解と伝達、提案型の報告・共有を行い、留守を預かるときの安心感を与えるように関わる。職員に対しては、日常的なコミュニケーションとして公平に「話す」「聞く」、コーチングによるマネジメントを行う（変化を「ほめる」→「認める」→存在を「認める」）。また、メッセージとして、「Iメッセージ」と「WEメッセージ」の活用、指導として「過去」より「未来」のことを（例：「なぜすぐにしなかったのか？」ではなく、「今からできることは何か？」）、「感謝」と「期待」をはさんで指導する。被援助志向性（周囲に援助を求める意識）がある教職員ほど労働時間が短いため、教職員の悩みは一人で抱え込まず、チームとして対応する。地域に対してはCSを活用し、地域とともに子供を育てる（放課後・休日の居場所づくり）、チーム学校の構築（教育業務支援員等の活用・人材発掘）、校長との役割分担（地域へ「協力」を求め「発信」する）を、校長指導の下に行う。

5 最後に

学校を取り巻く状況として、ネガティブな報道、長時間労働、ブラック企業、モンスターペアレント、なり手不足など、課題が山積している。しかし、2024年調査の「なりたい職業上位ランキング」では、中・高生ともに「教員」が10年連続で1位である。松山市の初任者研修で教員になった理由を聞くと、学生時代に良い先生と出会い、児童生徒の成長に関わりたいという教員に対しての憧れがある。このことから、学校教育・人材育成の重要性が伺える。教頭の業務は多岐に渡り負担は重い、その苦労が若い人材を育て、育てられた子供たちの中から次の世代の教員が生まれる。その教員が私たちを助けるようになる。「人材育成こそ、組織運営の要」である。

第4分科会



第 5 研 究 課 題

○ 教職員の専門性に関する課題

- * 教職員の専門家としての意識高揚に関すること
- * 教職員の指導力等の育成に関すること
- * 教職員の研修に関すること
- * 教職員の服務に関すること
- * 学校段階間連携を通じた、教職員の課題意識の向上に関すること
- * 教職員の協働体制の構築に関すること
- * 教職員の学校運営参画意識の向上に関すること



【第5分科会】 えひめ共済会館 4階 豊明

役 割	所 属	氏 名
指導助言者	松山市立小野中学校 校長	篠原 康展
提 言 者	高知市立江ノ口小学校	岡崎真理子
	上島町立岩城中学校	中井 将基
司 会 者	今治市立立花中学校	八木 春樹
記 録 者	上島町立弓削小学校	志賀 良

第5研究課題 第5分科会 「教職員の専門性に関する課題」

研究主題 「協働体制の構築と教頭の役割」

—— 支え合い、学び合う学校を目指して ——

高知市立江ノ口小学校 岡崎 真理子

1 研究の概要

未来を切り拓く魅力ある学校づくりを目指すためには、教員一人ひとりが自らの資質能力の向上を目指し専門性を高めようとしていく学校文化の醸成に組織的に取り組む必要がある。そのために教頭は、教職員の意欲の喚起や資質・能力の向上に力を注ぎ、学校教育の活性化と変革を目指していかなければならない。

しかしながら、どの学校も現状として、教員の年齢層の二極化、教員の人材不足、長時間勤務の是正などの課題が山積している。また、新しい時代に向けた持続可能な教育活動・学校運営体制を構築するため、学校における働き方改革の着実な具現化に取り組むことも重要である。

そこで、高知市教頭会第Ⅰグループでは、それぞれの学校の課題を踏まえ、学校の特色を生かしながら、教員の資質向上を図るための有機的な組織運営や体制づくりの在り方と教頭の役割について研究を進めることにした。教職員からのボトムアップの促進による校内研修の活性化やミドルリーダーの育成に向けての取組を活性化させることにより、協働体制が構築され、教職員の意欲の向上や学校参画意識の向上につながるであろうと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 江ノ口小学校・久重小学校の取組から ア 三部会の活性化 イ 教頭の役割	○ 研究内容の確認・助言 ○ 部長へのサポートと意欲の向上
(2) 他校の実践事例の紹介 ア メンターチーム会の実施 イ 教育相談講座の開設 ウ 教科主任会の実施	○ メンター長との連携 ○ 研究部との連携 ○ 教科主任との連携
(3) 成果と課題 ア 成果 イ 今後の課題	○ ミドルリーダーを中心とした協働体制の構築 ○ 効果的な業務の見直しの工夫

3 教頭としての今後の課題

- (1) ミドルリーダーを中心とした教職員間の連携の促進や若年教員の育成に向けて、更に成果をあげるために教頭としてどのような働き掛けが必要か。
- (2) ミドルリーダーの多忙感を解消するために、業務の改善や効率化に向けて、教頭としてどのように働き掛けるか。

第5研究課題 第5分科会 「教職員の専門性に関する課題」

研究主題 「教職員と地域や保護者との連携・協働ある学校づくり」

—— 離島地域の課題克服と職員研修を通して ——

上島町立岩城中学校 中井 将基

1 研究の概要

上島町は県内唯一の離島で構成された自治体で、小学校4校、中学校3校の計7校がある。令和元年度から弓削、生名、岩城、魚島の4地区で学校運営協議会を設置し、コミュニティ・スクールとして歩んでいる。また、各小中学校ではPTA活動も積極的に行っている。しかしながら、家庭数（児童生徒数）の減少や高齢化が加速し、学校運営協議会やPTA活動のメンバーに代わりが少なく、議題や活動の広がりが困難になっている。また、教職員の短い期間での人事異動が多く、経験年数の少ない教職員が重要な校務を担うこともあり、地域との協働活動にも影響が出ている。

そこで、より地域や保護者との連携・協働のある学校づくりに向けて、教頭として学校運営の体制づくりや教職員の職務意識の高揚につながる関わりについてどのような取組ができるか、研究と実践を行った。

2 研究の内容

実 践 内 容	教頭としての関わり
(1) 上島町小中学校の取組	
ア CSやPTA活動、統廃合の状況	○ 上島町教頭会での情報共有
イ ICT活用と交流活動や授業の状況	○ 教務主任会や他校との連携
(2) 具体的な取組	
ア 校内研修や初任者指導の充実	○ 校内研修体制のマネジメント
イ CSやPTA活動を通じた学校行事や見直した取組	○ 地域協力者との連携・協働
(3) 成果と課題	
ア 成果	○ 上島町教頭会での成果と課題の共有
イ 今後の課題	○ 地域との連携・協力

3 教頭としての今後の課題

- (1) 地域や保護者との連携・協働を図るためには、教頭としてどのような関わりや働き掛けをすればよいのか。
- (2) 若年教職員の活動に広がりを持たせたり、新たな人材を確保したりするために、どのような取組ができるか。

<研究協議>

Ⅰ 質疑応答

(1) メンターチーム会について

ア メンターチーム会について、詳細を教えてください。(愛媛県)

- メンターチーム会の開催頻度は月1回程度である。小規模校であるため、日常的にも職員室で意見交換を行うことが多く、会の内容としては、子供への支援の仕方や叱り方、保護者対応などが中心となる。25歳までの教員2名をメンティーと位置付け、悩みや課題を基に議論を交わした。

5年目の教員には、メンター長の役割を担わせ、学校運営に関わるという意識を持たせるようにしている。長く継続するための工夫として、1回のメンターチーム会を20～30分程度で終わることを基本としている。そのために、事前にメンター長がメンティーと面談し、困りごとを把握したうえで議題を設定していた。こうした日常的な悩みの拾い上げを通して、先輩教員が適切に助言を行う体制が整ってきている。また、生徒指導面だけでなく学習指導面も議題の対象とし、ベテラン教員と若手教員、さらには若手教員同士の交流・協働を促進する場としてもメンターチーム会を活用していた。

(2) 会合について

ア 離島地域における会合の持ち方について教えてください。(高知県)

- 上島町では、小中学校が所在する4島のうち1島が本土や他の島と橋で結ばれていないため、他島への移動には1日4便の船を利用している。この船便の制約を踏まえ、会合は14時から15時30分の時間帯に設定している。短時間で効率的に会合を運営するために、議題を精選するとともに、会合外では電話やメールでの連絡・調整を大切にしている。

2 グループ協議

- 若年教員へのフォローは手厚い一方で、働き盛りのミドルリーダーへの支援が不足していると感じられる。積極的な声掛けを行い、精神的負担の軽減を図ることが求められる。
- 近年、学校が統合された経緯があるため、行事等において各地域間のバランスを取ることに難しさがある。子供や教員双方にとってのメリットを考慮しながら調整を行っている。
- 教員の専門性の向上については、主任の若年化やコロナ禍による経験不足が課題として挙げられる。役割を積極的に任せたり、ベテラン教員と若手教員で学年部を構成したりするなど、互いが成長できるような工夫を行っている。
- ベテラン教員が若手教員に経験談を伝える取組を進めており、若手教員には教師としてのやりがいを感じてもらうとともに、ベテラン教員のモチベーション向上にもつながっている。
- 小中連携の一環として、教員の交流を実施している。中学校の教員が来校した際には授業参観を積極的に行い、専門性の向上を図っている。
- 若手教員には困ったときに声を上げるよう指導し、ベテラン教員にはその声を受け止める姿勢を求めている。
- ベテラン教員が若手教員の困りごとに助言する一方で、若手教員がベテラン教員にICT機器の操作方法を教えるなど、相互に良好な関係を築いている。
- 働き方改革として、職員会や諸連絡のDX化、学校行事の精選・改善などに取り組んでいる。また、短縮校時や学期始めの4時間授業の実施によって、子供の負担軽減にも配慮している。
- ミドルリーダーが少なく、若年教員が多いなど年齢構成の偏りはあるが、組織内の横のつながりを大切に、教員の指導力向上を図っている。
- 生徒指導に関する情報交換の機会を多く設け、共通理解のもとで一貫した指導を行うよう努めている。
- 若年教員の増加を踏まえ、若手教員が活躍できる場を意図的に設定することで成長を促し、自身のやりがいにつなげている。
- 互いの悩みを共有し、その解決に向けた先輩教員の助言や学校の取組をテーマに、校内研修を実施している。
- ベテラン教員の助言が若手にとって負担となっていないか、また若手教員を気遣うことがベテラン教員のストレスにつながっていないかなど、管理職として注意深く見守っている。

＜指導助言＞

1 はじめに

グループ協議は、徐々に熱を帯びてきていた。本日は六つの分科会があり、みなさんは縁あって同じ分科会になり、同じグループとなった。このつながりを大切にしてほしい。そして、私も、今日のご縁を大切にしたいと思う。

2 若手の育成について（『日本教育』（日本教育会）令和7年11月号より）

「若手」という言葉によって無意識のうちに相手を区別し、「若手」を育成しなければならないという一方的な視点に偏っていないかを意識することが重要である。デジタルネイティブ世代である彼らは、私たちが知らない新しい文化や価値観を持っている。その考えを理解しようとする姿勢を持つことで、教職員全員が互いに学び合い、同志としての感覚を忘れないことが大切である。

(1) 3部会

「授業づくり部」「仲間づくり部」「体づくり部」の3部会は、学校運営計画にきちんとリンクしており、形だけの活動になっていない。ミドルリーダーが不在で若手が多いことを嘆くのではなく、3部会を中心に若手教員に責任を持たせ、管理職はサポート役に回る姿勢が重要である。ボトムアップを意識し、実現可能な提案を受け入れる管理職の覚悟も求められる。その際の鍵となるのは、ベテラン教員の明るさや、学校全体に流れる前向きで温かい同僚性の高まりである。また、小規模校では学年団がないため、3部会で授業や学校運営について話し合い、組織として連携しながら活動することになる。こうした教職員同士の濃密なつながりが、結果として負担軽減にもつながっている。

(2) 小中高・地域との連携

生徒の学びを、若手教員のスキルアップにつなげている。他校生徒とのリモート学習や交流学习、地元高校との連携を通して、若手教員は新たな知見を得て自信を深め、指導力向上につなげている。また、小中連携や地域との協働を生かし、教職員の負担軽減を図りながら関係性を強める工夫も進めている。さらに、次世代の担い手を育てるという視点から、中学生や高校生、地域の若手人材をコミュニティ・スクールやPTA活動に参画させる取組も、今後は一層有効になると考えられる。

3 「協働」について

若手教員を育て、教職員同士のつながりを深め、保護者や地域との関係を築くことは、「協働」を進めるうえで非常に重要である。そのコーディネイト役を担うのが教頭である。「協働」や「連携」の本質は結局「人」であり、「人」と「人」をいかに結び付けるかが鍵となる。その際、相手に思いを正しく伝えるためには、相手が何を考えているかを理解し、考える作業が欠かせない。言い換えれば、それは「傾聴力」であり、コミュニケーションにおいてこれほど重要な能力はない。

4 管理職の役割について

校長の役割は、学校のビジョンを示すことであり、その内容は各学校の教育計画やグランドデザインに明記されている。ここには、どのような子供を育てたいか、どのような学校にしたいかという理想が盛り込まれる。そして、4月以降、先生や子供、保護者に対して、さまざまな機会を通じてそのビジョンを発信していく。その際、教頭が自らの言葉で校長の思いを伝えることができれば、より理解が深まる。校長と教頭が互いに理解し合い、共通の理想を持ちながら、校長はビジョンを示し、教頭はその具体的な達成方法を考えることで、円滑な学校経営が可能となる。

5 おわりに

私たちの教育実践や教育活動の中心は、常に子供たちである。子供たちは大規模校、小規模校に関わらず、地域に愛着を持ち、それぞれの学校で夢を抱きながら成長している。地域にとどまり、地域を盛り上げてくれる子供たちの姿を期待する一方、彼らには、大きな夢を持って広い世界に飛び立ってほしいとも思う。

将来的には、子供たちがたとえその地域に住まわなくても、様々な形で学校や地域を応援してくれるような「循環型の教育」を目指したいものだと考える。

第5分科会



特別課題分科会 (講演)

演題

「学校と地域の絆が子どもと地域の未来を創る」 ～ これからの学校と地域 ～



■ 講師

一般社団法人コミスクえひめ代表理事
元文部科学省CSマイスター

にしむら くにお
西村 久仁夫 氏

【略歴】

- 一般社団法人コミスクえひめ代表理事
- 元文部科学省CSマイスター
- 愛媛県教育委員会CSアドバイザー
- 宇和島市教育委員会教育推進員
- 宇和島市教育委員会統括コーディネーター
- 元宇和島市立吉田中学校長

【プロフィール】

平成25年度に愛媛県で初めて「コミュニティ・スクール」を導入し、文部科学省の「コミュニティ・スクール推進員(CSマイスター)」として活躍。

平成30年7月に西日本豪雨災害を校長として体験。校長を務めていた宇和島市立吉田中学校では、校舎が約1.5メートル浸水するなど、大きな被害が出た。災害直後から避難所運営に当たり、人道的立場から被災者支援に当たる。吉田中学校でも、赴任した平成28年度に「コミュニティ・スクール」を導入。被災後の復旧に、「コミュニティ・スクール」が機能した。

これらの経験から平成31年4月一般社団法人「コミスクえひめ」を立ち上げ、子どもたちの明るい未来と活力ある地域社会を創るため、学校と地域の思いをつないで、強い絆を築く活動に取り組んでいる。

【特別課題分科会】 松山市民会館 大ホール

役 割	所 属	氏 名
司 会 者	上島町立岩城小学校	友近 将道
記 録 者	東温市立川内中学校	大野小百合
	愛南町立一本松小学校	山本 雅貴

I 激甚災害への向き合い方

最初に、激甚災害への向き合い方についてお話しします。私が校長として赴任した学校が西日本豪雨で被災しました。これほど大きな災害に対し、学校はいかに向き合うべきかと考えたとき、東日本大震災の情景を思い出しました。私は、当時勤務していた、愛媛県総合教育センターで事態を聞きつけ、テレビを点けました。悲惨な状況を目の当たりにし、「もし学校でこのようなことが起こったらどうすべきか。」と自問しました。その後、しばらくして、ある動画が公開されました。それは、震災から10日後に行われた、中学校の卒業式の様子でした。この映像、この情景を御覧になった方もおられるかもしれません。(映像視聴)

この映像を見た時、私は教員として、この生徒たちにどう向き合っていくべきか、と深く考えさせられました。防災教育は全ての学校で真剣に行われているにもかかわらず、このような事態が発生する。この学校では、卒業式の前日に被災したため、卒業式を行うこともできず、10日後に学校の体育館で卒業式を挙行しました。通常の場合での卒業式ではないことは、この写真や映像を見ていただければお分かりいただけると思います。通常、卒業生が座る場所、在校生が座る場所、保護者がいる場所には、大勢の避難した方々がおられます。この光景を目の当たりにして、赴任した学校では、激甚化する災害に備えた防災教育に注力しなければならないと痛感しました。

その後、赴任した学校では、たくさんの講師の方にお越しいただき、防災教育を実施しました。防災教育に取り組んでおられる方々・防災の専門家と言え、例えば救命救助を行う消防署の方々、市町村の危機管理課、あるいは災害NPOなど、様々な団体があり、学校の教職員も一方の専門家として防災教育を実施しています。多くの人々が災害への備えを行っていますが、「教育者が行う防災教育はどうあればよいのか」ということが、ずっと頭の中にありました。

そして直面したのが西日本豪雨災害です。吉田中学校は、1階部分の備品を全て失いました。7月7日に災害が発生しました。発災直後の対応では、「何とかして早く学校を再開させよう。子供たち同士を再会させよう。」と考えました。それは、発災3日後に、復旧ボランティアに来た中学生が、抱き合って互いの無事を喜んでいる姿を見たからです。そこには、親にも、教師にも代わりがでない友達同士の絆がありました。できるだけ早く学校を再開させたいと思いましたが、通学路が寸断されていたため、中学校への登校は叶いませんでした。そこで、地元小学校の教室をお借りして、7月17日から再開しました。その後、通学路の安全を確認し、再び中学校に集まることができたのは、約2か月後の8月27日のことでした。

それから約8か月、3年生の卒業まで、生徒と教職員がどのようにして災害を乗り越えていったのか。映像が残っていますので、ご覧ください。(映像視聴)

8か月の間、常に頭の中にあったのは、東日本大震災で目の当たりにした、被災生徒の悲痛な叫びでした。ずっと、「教育は激甚災害にどう向き合っていくのか。」という問いへの答えを探していました。

見ていただいた映像の背景を説明します。災害発生当日、私は何とか夕方には学校にたどり着くことができました。水が引いた後の学校の様子を見たとき、「もうこれは駄目だ。しばらく学校は再開できないだろう。」と感じました。

また、体育館が使えないため「一体どこで卒業式を行うのか。」ということが頭をよぎりました。3年生は、あと8か月で卒業し、義務教育を修了する。その義務教育最後の1年がこのような状況になった中で、我々教職員は、子供たちに何ができるのか、と深く考えました。「今年は災害があって散々な1年だった。」という思いで卒業させるのではなく、「吉田中学校で学んでよ

かった、苦しかったけど吉中生でよかった。」と思って卒業してもらいたいと願ったのです。

しかし、教職員だけで学校の復旧・復興ができるわけではなく、頼ったのが学校運営協議会の仕組み（コミュニティ・スクール）でした。学校運営協議会を開催したのは9月5日です。委員である保護者も、地域の人たちも大きな被害を受けています。そのような中であって、「どうか、この吉田中学校の生徒たちのために、何とか手を貸していただませんか。」とお願いしました。未だ自宅から災害ごみを搬出することも困難な状況にも関わらず、全ての委員が学校運営協議会に参加していただきました。体育祭が目の前に迫っています。小学校の校長先生には「体育祭の道具をいくらでも貸しますよ。」と言っていました。グラウンドも体育館も使えない部活動について、吉田高校の校長先生からは「練習場がなければうちに来てくださいよ。」言っていました。体育館が使えるようになる2月まで、地域の人たちから大きな支援を得て、様々な行事や教育活動が実現できました。3年生は、大きな達成感と笑顔で、卒業していきました。

なぜ、今の教育が「学校と地域の協働」にかじを切ったのか。「学校と地域の協働による教育」「社会に開かれた教育課程の実現」の先にある姿がここにあるのだ、と感じた1年でした。

卒業式を終え、終業式を終え、離任式を終えて、定年退職しました。

8か月の間、教職員は子供たちに対して「これだけ地域の人や日本全国の人が、みんなを助けてくれている。皆はその恩にどう報いていくのか。」という言葉、伝え続けてくれました。その結果、子供たちは地域に出て、自発的にボランティア活動を行うようになりました。ある女子生徒は、「誰かのために何かできる大人になりたい。」と言って卒業していきました。その思いは、ほとんどの中学生が抱いていたことだと思います。

私は、この年で定年退職を迎えました。子供たちや教職員の姿を見続けてきたことが、「一般社団法人 コミスクえひめ」につながっています。現在、仲間とともに、学校と地域をつなぎ、そして子供と地域の明るい未来をつくるための活動を行っています。

2 「悲劇の中、日本に集まる世界の賞賛」

二つ目のテーマとして「悲劇の中、日本に集まる世界の賞賛」についてお話しします。

世界中で頻発する激甚災害の様子は、情報化社会の進展により、瞬く間に発信されます。毎年のように悲劇的な状況を目にするようになりました。その多くの情報の中で、阪神・淡路大震災のスーパーの前で整然と自分の順番を待っている1枚の写真が世界の人々から大きな賞賛を受けました。東日本大震災では、東京の地下鉄の階段で両サイドに人々が座り込み、その間を人が行き来する映像に、大きな賞賛が寄せられました。激甚災害時、多くの国では、大規模な暴行と略奪の様子がニュースとして流れます。本当に悲劇的な出来事があるにもかかわらず、日本人はなぜこのような振る舞いができるのか、というのが賞賛の理由です。

このことについて、岡本薫先生が、著書『新不思議の国の学校教育』の中で、次のように述べておられます。

「日本有数の大都市である神戸の人々は、震災発生までは近所付き合いもそれほどなかったにもかかわらず、被災後の厳しい状況において、負傷者の救援や援助物資の配分などについて、驚異的な協調性と集団マネジメント能力を発揮しました。神戸市民の活躍ぶりの内容や、極めて厳しい状況にあっても暴行、略奪などの凶悪犯罪が非常に少なかったことは、諸外国のメディアによって最大限の驚嘆と賛辞をもって全世界に報道されました。こうした能力は、遺伝であるはずがなく、どこかで学ばれているはずですが、日本人の場合、それは明らかに小・中学校でしょう。し

かし残念なことに、神戸での市民の活動と、小学校での掃除当番や班別活動などを結びつけて論じた日本人は、ほとんどいませんでした。日本の人々は、良いことも良くないことも含めて、学校では何が行われており、それがどのような効果を持っているのかということを、もっとよく見るべきでしょう。」

西日本豪雨災害では、玉津地区の道路が遮断され、3日間、だれも立ち入ることができませんでした。しかし、子供から大人まで、力を合わせて、危機的状況を乗り越えました。

一方で、阪神・淡路大震災などで指摘され続けている「日本の避難所 いつまで続くぞ寝状態」という報道も目にします。西日本豪雨災害でも、小学生、中学生と高齢者が何もすることもなく、じっと座っている避難所の様子を目にしました。一方、大人は復旧作業に出掛けている。きっと子供は、「危ないから、避難所にいなさい。」と言われていたのだらうと推察します。でも、我々教員は、小学校1年からずっと日直や掃除当番、給食当番、班活動を通して、集団の中でそれぞれの役割を果たすという教育を行っているはずで、子供はいつまでも守られる立場で良いのか、いつまでも守られる立場でいいのかということを痛切に感じています。

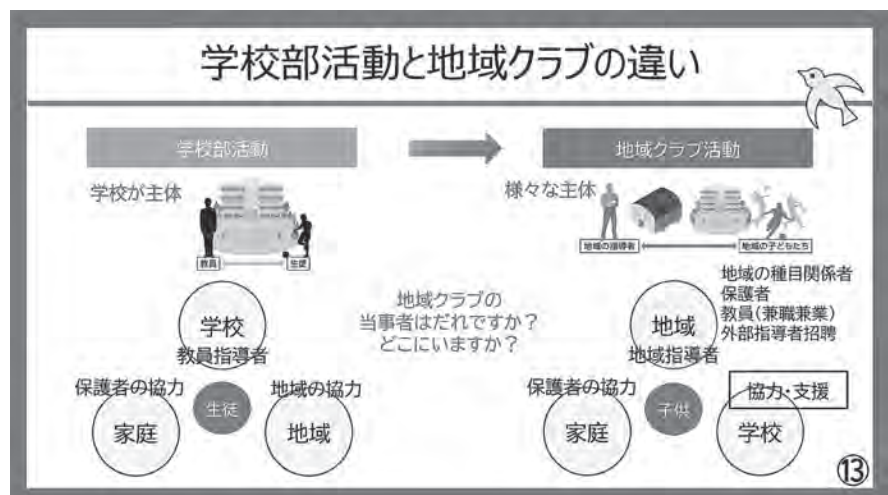
子供たちは、いつまでも守られる立場ではない。誰かのために何かできる存在である。それは小学生であってもきっとそうです。命を守る防災教育が最重要であることはもちろんです。一方で学校が行う防災教育が、子供たち自身が防災の主体者になれる教育あることも必要だと思えます。防災教育の専門家である教員の役割の一つが、防災の主体者となる子供を育てることにあると思えます。

3 中学校部活動の地域移行・地域展開

三つ目のテーマ「中学校部活動の地域移行・地域展開」について考察します。

スポーツ庁と文化庁からは、既にリーフレット等が発行されていますが、休日の部活動の地域連携・地域移行が始まっています。内容は、要するに学校が運営する部活動から、地域が運営する地域クラブ活動への転換が進んでいくということですが、今後、どのように進んでいくのでしょうか。中学校の教頭先生方は、きっと既にその議論の中におられると思えます。

開始年度は市町村によって異なりますが、学校主体の学校部活動が、様々な主体となる地域クラブ活動へと移行します。これまで教員が生徒を指導していた形が、地域の指導者が地域の子供たちを指導する体制になっていきます。このスポーツ庁の資料を見て、何か感じられることはあるでしょうか。なぜ、左側は「教員と生徒」と記載しているのに、なぜ右側は「地域の子供たち」と記載しているのでしょうか。中学校の部活動の地域移行なのですから、「生徒」でよいのではないかと思います。部活動の地域展開が中学校の部活動を単に移行するのではなく、「将来にわたって子供たちが継続的にスポーツ・文化芸術活動に親しむ機会を確保・



充実する」ことを目的としていることの理解が必要です。総合型地域クラブという言葉も盛んに使われます。子供から高齢者まで、様々なスポーツ・文化芸術活動に親しめる環境づくりが進んでいくだろうと思います。所によっては、対象となる世代は小学生であったり大人であったり、中学生に限定されていない環境づくりが求められていくものと考えます。

また、右側の「地域指導者」とは誰なのでしょう。それは「地域のスポーツクラブの人たち」というのが、様々な教育委員会が示す方針の中で出てきていますが、そんなにスポーツ団体が地域にあるのでしょうか。都会ならまだしも、地域指導者は、地域でクラブを立ち上げようとする人かもしれませんし、過去に自分がその種目を経験している人かもしれません。あるいは、保護者の方が指導者になるかもしれませんし、一部は教員が兼職・兼業で行うかもしれません。外部から誰かを招くこともあるかもしれませんが、予算がない中、なかなか難しいのが現状です。また、教員の兼職・兼業とは、一体誰のことでしょうか。これは、中学校の教員だけではありません。小学校の先生方も、兼職・兼業の許可が下りる対象となっています。全国で苦勞しているのは、指導者をどなたにするか、という点です。多くは「教育委員会が指導者を探してください」という流れですが、そもそも部活動を指導している現役の教員や、保護者の方々が探して分からないものを、教育委員会が探して見つけ出すことができるわけがない、と私は思っています。

では、これをどのようにして課題解決すべきか。難しい問題だと思います。子供たちの希望する種目をできるだけ叶えてあげたい、という願い。指導者は、中学校の教員だけではなくて、小学校の先生方も、もし「やりたい」、「やれる」、「やっても良い」という人がいるのであれば、そこは教育委員会の了解を得ながらすることができシステムになっていくのです。

しかし、これをどう進めていくのでしょうか。既に中学校の部活動の数は、随分と減りました。そもそも子供の数が減ったら、部活動をする者がいないのですから部活動は減ります。教員が減りますから、指導する者がいない。中学校の部活動がなくなる理由の一つ目は、子供がいない、二つ目は指導者がいない、三つ目は活動する場所や設備がなくなった、です。そのようなことが起こっている中で、「『教育委員会、何とかしてよ』でよいのか」、と思っています。私も明確な回答を持っているわけではありません。しかし、災害を始め、想定できないことが起こる世の中を生き抜くためには、子供も大人も、自力で課題を解決する力が必要だと思います。自ら課題を見付け、自ら考え、自ら解決をするのは、生涯にわたって必要な力ではないでしょうか。

では、部活動の地域展開を学校・家庭・地域が自力解決する道はあるのでしょうか。それが学校運営協議会です。今、地域展開を進めているところで、コミュニティ・スクールと部活動の地域展開を結び付けて検討しているところがどれくらいあるのでしょうか。そもそも、学校課題・地域課題を解決するための仕組みである学校運営協議会が、この課題に目を向けることは必然であると、私は思うのです。

一方、地域団体であるコミスクえひめとして何かできないかと、商店街に赴きました。宇和島市の商店街は今どういう状況かという、多くの店舗がシャッターを閉め、人の往来もとても少なくなっています。今でも、廃業しているところが増えています。商店街の活性化について話し合う会議に参加した時、「あれ、これひょっとしたら商店街が地域クラブを設立できるのではないか。」と思いました。同級生が経営するカラオケボックスへ行って、「中学校の部活動が地域主体で行うようになっていくようだが、カラオケボックスで音楽部の活動ができないかな。」と聞くと「できるよ。」という返事です。教え子が経営するパソコン教室に行って「パソコン部として活動できるかな。」と尋ねると「できます。」という返事です。子供たちの課外活動を支える仕組みが

整いそうだなと感じました。それなら、「まちなか部活ストリート」を作ろう、と考えました。宇和島は、牛鬼が観光の目玉としてあり、宇和島商店街の横を貫く「牛鬼ストリート」と命名している通りがあります。それならば、商店街を貫く「まちなか部活ストリート」を作ってみるかと考えました。商店街には楽器店があり、カラオケボックスがある。和菓子屋さんやケーキ屋さんがあるから、家庭クラブができるかも。様々な妄想が湧いてきます。商店街に人たちが本気になれば、新たな文化芸術活動を生み出せると思います。総合型地域スポーツクラブがあるように、「総合型地域文化クラブを宇和島商店街に作る。」というのも、有りだと思っています。これまで部活動と違って、「子供たちが活動のときにお菓子を食べるのでは。」とか、「真面目にしない。」だとか、「だんだん学校が荒れるようになるのではないか。」という心配の声もあります。生徒指導上の懸念はありながらも、学校と家庭と地域が力を合わせて、学校運営協議会と地域学校協働活動を一体的に進めることで課題を解決する道があると考えます。

これまでの学校部活動では、母校の名前を背負い、レガシーを引き継ぐべく試合や大会に臨んでいました。その所属意識が生徒のアイデンティティを形成する場として、部活動は存在していました。そこが崩れていったときにどうなるのか、という懸念もあります。しかし、現状を受け止めながら、全国で、四国の中で何か解決策を見付けて「このような解決策があったのか。」というものができたらいいな、と思っています。部活動なので、自分の技術、技能を高めるために、自分の学校ではなくて、他のところで高めるところがあるのだったら、そこに行くのも有りです。ソプラノ歌手になった同級生は、高校時代、毎月東京にレッスンに行っていました。また、私の教え子は、リトルリーグで自分の腕を磨きたいと、中学校の部活動に入らずにそちらで活動していました。彼らは選抜で甲子園優勝をしました。そのような道に行くというのは、それはそれで有りです。そこを否定するものではありません。四国を離れて、都会でもたくましく生きていく、そのような子供たちを育てるというのは、やはり有りであろうと思います。一方で、「地域の子供は地域で育てる」という、生まれ育った故郷に自信と誇りを持って、学んだ学び舎に誇りを持って生きていく教育と、そしていずれ故郷のために頑張るという、この両立というのは昔からの課題です。実際、このように今、明確な答えのないことをこの場で投げ掛けたのは、教育委員会が主導して進めている中でも、当事者が当事者意識を持って考えていかないと、本当の課題意識は高まらないし、持続可能にもなりにくいと考えてのことです。そこで、教育活動の充実と学校課題・地域課題の解決を図るために導入されている学校運営協議会の機能について話をします。

4 学校運営協議会の機能

学校運営協議会というのは、地域住民、保護者、地域学校協働活動推進員等（地域コーディネーター）等によって構成される合議制の会議体です。西日本豪雨災害では、学校運営協議会が、教育活動の充実と学校の復旧・復興という、大きな課題を解決しました。発災後、最初の学校運営協議会は9月5日でした。2か月の間を空けたのは、全ての委員が被災者であったからです。

9月5日が、吉田中学校の復興のスタートとなりました。会議を重ねていって、「では、何ができるか。」と、知恵を集め、力を集めて学校課題を解決していったのです。

では、吉田中学校勤務の3年間で、学校運営協議会のテーマとしたことを紹介します。

平成28年の赴任と同時に、教育委員会に学校運営協議会の設置をお願いし、宇和島市で最初の吉田中学校型学校運営協議会をスタートさせました。最初のテーマは、「部活動の統廃合」でし

た。「もう人数を維持できないので、部活動を削減しなければならないのですがどうしましょう。」というのを投げ掛けたのが1年目。協議会の委員は、「学校の部活動がここまで厳しい状況になっているのか」と驚き、保護者や地域住民への広報役もしていただきました。必ず問題となる部活動の廃部問題が、トラブルもほとんどなく解決していきました。

2年目は、創立50周年に当たり「学校だけでは難しいのですが、何か良いアイデアはありませんか」と投げ掛けました。「教育委員会から補助金をもらえないのか。」「いや、その予算はありません。」というやり取りがありました。「では、寄付を集めるか。」「いやいや、学校が寄付を集めるというのは……。」と答えると、自治会長さんが、「それだったら、自治会で寄付をお願いしてみるか……。自治会がやるのだから、PTAもやるだろう。」ということで集まったお金が300万円です。300万円で様々な物を購入させていただきました。また、記念誌の作成や、新旧部活動対決、卒業生を招いての記念式典を実現しました。新旧部活動対決では、60歳を超えた創立当時バレーボール部だった方々が中学生と対戦するなど、盛大に行うことができました。

3年目は、お話ししたとおり、西日本豪雨災害からの復興です。学校運営協議会がなかったら乗り越えられなかったと、今でも感謝しています。

学校運営協議会の機能は、大きく二つに分けて考えることができます。一つは、社会に開かれた教育課程を実現するために、授業改善に資するような話し合いをすること。もう一つは、学校課題と地域課題を解決することです。今、喫緊かつ重大課題は、学校課題でもあり地域課題でもある「コミュニティ防災」と「部活動地域展開」です。防災教育では、特に、学校避難所が課題になると思います。西日本豪雨災害では、校長と教頭、教務主任が命がけで学校に駆けつけました。今考えると、本当は行くべきではない状況でした。教職員が来ずに、学校が避難所機能を果たすにはどうすればよいかという手立てを講じておかないと、せっかく守られた命、守られるはずの命をつなぐことができないかもしれません。学校避難所が機能しなくなったら、その近隣の人たちの命をどうやって守るのでしょうか。学校を避難所としている人たちの命を守る訓練が必要です。コミュニティ防災という考え方が今、出てきています。3日間、命を守ったら助けが来るのです。だから、その3日間、命を守れる学校避難所にするにはどうしたら良いかを、学校運営協議会で熟議することが有効です。自主防災組織もあります。自主防災組織も一緒にやったら良いのです。ある学校が防災参観日をやりました。小学生は、教員より何がどこにあるか知っていますから、学校運営協議会と小学生と一緒に、防災に必要なものがどこあるのかを確認しました。このように、防災グッズを置いている場所をみんなで確認したら、教員がいなくても避難所は開設できるのです。命を守るためであれば、鍵が開いてないとしても、ガラスを割ってでも入らないと命を守れない時があります。その共通認識をするのに、学校運営協議会は極めて有効です。

5 終わりに

学校と地域がつながって、本気で子供たちと地域の未来を保証する営みをすれば子供たちはどのように育っていくのか、大人の思いや願いを知った子供たちはどのような大人になっていくのでしょうか。教育の成果はすぐに現れません。だからこそ、教育に携わる者は、子供たちのより良い成長と将来の幸せを願って、子供に向き合っているのだと思います。

昨年、吉田中学校は復興祈念式典を行いました。そこで私のところに「卒業生を呼ぶことはできますか。」と相談がありました。何とかやるのではないだろうか、当時の生徒会役員の保護者に連絡をしました。生徒会役員の7名は、高校卒業後全員進学していました。7月でしたから、

試験前の忙しい時でした。高知から1名帰ってきました。そして、徳島から1名Zoomで参加しました。あとは、松山、広島、京都、愛知、北海道からは帰って来られませんでした。Zoomも叶わなかった人たちは、メッセージを送ってくれました。復興祈念式典のニュース映像と卒業生の後輩へのメッセージ映像をご覧ください。(映像視聴)

先ほど学校部活動で申し上げた学校のレガシー（次世代に受け継がれるもの）を先輩から後輩に引き継いでいく営みは、母校への誇りと故郷への愛着を育てるために、とても大切なことだと思っています。

最後に、ここにおられる皆様方の中にも、吉田中学校、あるいは立間小学校、宇和島市吉田町に助けに来てくださった方もおられると思います。皆様が助けてくださったときの思いは、必ず子供たちに伝わっています。思いは伝わるのです。教育とは何か、皆様もそうですし、後に続いている後輩たちが、一生の仕事として教職を選んでいることへのやりがいを感じ、生きがいとしてこの仕事に当たれるようにと願っています。

一方で、教員は直接的に子供に向き合うこと以外に様々なことが求められています。この課題を解決するために、学校は、学校運営協議会と地域学校協働活動という強力なツールを手に入れました。このツールをどうやって教育の中に生かしていくのか。ただ淡々と会議をしているだけでは、コミュニティ・スクールとしての機能は果たせません。学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たさなければならないのです。「役割を果たす」といえば、先ほど、キーワードとして挙げた「自力解決：探究」以外に、これからの学校と地域の関係に必要な「協働」という言葉があります。平成15年、学習指導要領の一部改訂がありました。総合的な学習の時間の解説には、「協同的な学び」という用語がありました。ただ、その「協同」は、協同組合の「協同」でした。ところが、平成20年改訂の学習指導要領では、「協働的な学び」の文字に替わっていました。この「協同」と「協働」は何が違うのでしょうか。『一緒にやりましょう』という「協同」から、『同じ目標に向かって、それぞれが役割を果たしながら実現をしていく』という「協働」に替わったことの意味を理解することが重要です。「同じ目標」という言葉と、「役割を果たす」ということが、この「協働」の二文字には込められているのです。これまでの会議体では御意見をお伺いしますということがほとんどで、何かあったら学校が解決しなければならない、何もかも学校は背負わなければならないように話が進んでいくことが多くありました。「これ、こうしたらどうかな。」という意見に、「ああ、そうですね。それ本当に良いと思いますが、どなたかできる方いますか。」と、委員の皆さんに投げ返すことが必要です。学校だけではできないことを理解してもらえばいいのです。学校運営協議会が実現をするために、皆が協働するために、淡々と議事が進むような会議ではなく、皆が当事者になれるような会議になっていったら、きっとよくなります。そうすれば、先生方にとっても、子供にとっても、保護者にとっても、地域の人にとっても幸せになれるウェルビーイングが実現できるだろうと思っています。

6 質疑応答

Q. 現在の部活動の、いわゆる地域展開について

学校運営協議会の機能を最大限活かすために、部活動展開に関しては、どのようなことを心掛けたらよいのか。

A. 学校は、これまでに多くの部活動をなくしてきている。これは、「希望する子供がいない」「指導者がいない」ことを理由としてなくなってきた。主体が地域に移ったとしても、子供がい

なくては、「ではやるか。」ということにはならない。現状を最初に認識しておくということは、大切なことである。学校運営協議会を活用する理由というのは、解決をするということもあるが、現状を知っていただくということが大切である。多くの地域で「地域展開はどうなっているのだろう。」という人はたくさんいると思う。分かる範囲で学校運営協議会において協議をすることが、解決できなくても状況を伝えるということにつながっていく。現状を伝え、納得してもらうことが大切だと思う。

Q. 学校運営協議会のメンバーの代替わりについて

先生のお考えを聞かせていただきたい。

A. 長く続く必要はない、と考える。私は「大体2年ぐらいで交代いただくことを御了解ください」と伝えていた。「理由は、できるだけ広く、多くの方に関わっていただきたい」ということも伝えた。交代後、また改めて入っていただくことは当然ある。任期について、校長先生、教頭先生がある程度決めておくというのは、一つのポイントであると思う。メンバーについてはある程度の年数で代わっていただくことや、何をテーマにするかによって、メンバーは代わることがある、ということを伝える。先ほど申し上げた部活動の地域展開における話合いをするときには、地域でその活動をされている方々に参加していただくようにする。そして、職場体験学習を実施することに重点を置く際には、吉田中の場合はJAの方、そして商工会議所の方に入ってもらった。テーマによって必要な方が入るようにするのだ、ということをきちんと伝えておく。また、「来年度はこのような方に入っていただきたいと思いますので、次またお願いする時まで休んでいただくことになります。」などを伝えておけば、問題はない。

また、15名がそろわないこともあると言われたが、そもそも人数はそろう必要がないと考える。必要な方がおられるのであれば、そこで会を開き、結果報告をするということでもいい。日程も全部調整するというのは、非常に大変なため、「そろわなくても実施するということも前提です。」という点を共通認識しておくというのは大切だと思う。

特別課題分科会



参加者の声

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

香川県小中学校教頭会 坂出市立東部中学校 武上 大輔

第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)が「いで湯と城と文学のまち」松山で開催された。研究主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり～夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子供の育成～」のもと、＜自立・協働・創造＞をキーワードに、子どもたちが笑顔で安心して学べる学校づくりに向け、教頭としての役割や在り方について協議が行われ、学ぶことの多い有意義な大会となった。

午前は「アーティスト 石村嘉成のキセキ～発達障がいのがわが子と歩んで～」と題し、画家・石村嘉成氏と父・和徳氏による記念講演が行われた。嘉成氏は2歳で自閉症と診断され、小学5年時に母を亡くしたが、父母の深い愛情に支えられたことが原点であると語った。和徳氏は「時に厳しく接し挑戦させ続けた」「きちんとした機会を与えればこの子はできる」と述べ、障がいへの理解不足が困難を招くことを指摘した。合理的配慮が求められる現在、障がいのある子どもへの接し方について多くを学び、『すべての子ども一人ひとりの光るところを見つけ、伸ばしていく』ことこそ教師に課せられた大切な使命であると実感した。

午後は7会場に分かれて分科会が行われ、私が参加した第1B分科会では、「教育課程に関する課題」について2つの提言がなされた。香川県からは「家庭・地域と協働した学校教育活動を推進する教頭の役割」について発表があり、地域学校協働活動モデル校の事例が紹介された。PTA、おやじの会、子ども会育成連絡協議会など12団体が学校運営協議会を構成し、地域コーディネーターと連携した取組は大変参考になった。続いて愛媛県から「家庭・地域との連携及び協働における教頭の役割」について発表があり、伊予地区小中24校が持続可能な体制づくりを共有し、地域資源を活用した活動や異校種間連携の事例が紹介されていた。家庭・地域との連携推進及び協働において、教頭として担う役割を考えるよい機会となった。グループ協議では各校の実態を報告し合い、学校運営協議会やPTA活動の持続可能性について議論し、多くの示唆を得ることができた。

本大会を通じ、これからの時代に求められる学校と教員の姿を改めて認識し、教頭として学校経営にどのように参画すべきかを考える貴重な機会となった。

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

香川県小中学校教頭会 さぬき市立さぬき南中学校 山下 司

第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)が「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり～夢と志を持ち 絆を深めながら可能性に挑戦する子どもの育成～」の研究主題のもと、愛媛県で開催され、学びの多い有意義な大会となった。

記念講演では、「アーティスト 石村嘉成のキセキ～発達障がいのがわが子と歩んで～」と題して石村和徳氏から発達障がいの息子の療育を通じた体験について貴重なお話を伺い、嘉成氏の見事な版画制作のパフォーマンスを見せていただいた。当時確立されていない自閉症の療育に向き合ってきた和徳氏の子を思う深い愛情と揺るぎない信念に感銘を受けるとともに、私自身が教師という仕事を通して、どれだけの信念をもって生徒たちと向き合うことができているのか考えさせられた。和徳氏のがわが子との向き合い方は、多様性を尊重する社会の中で、個々の生徒とどのように向き合っていくべきかという点で指針となる御講話であった。さらに、動物が大好きで観察が得意な嘉成氏の描く動物は、今にも動き出しそうな迫力があり、心に強く響くものがあった。

また、分科会は特別課題に参加し、「学校と地域の絆が子どもと地域の未来を創る～これからの学校と地域～」と題して西村久仁夫氏から、激甚災害への向き合い方、部活動の地域展開、学校運営協議会等について、示唆に富む御講話をいただいた。激甚災害等の悲劇の中で日本人のもつ協調性と自治的能力が世界から賛辞を得ており、その資質・能力を育てたのは学校教育であるという話に深く納得するとともに、これまで多くの先生方が築いてきたレガシーを私たちが更に発展させていかなければならないと感じた。学習指導要領の中で、社会に開かれた教育課程の実現が示されており、教育目標の実現、防災教育、キャリア教育、部活動の地域展開、ふるさと教育等の充実・推進が求められている。教頭として、日々の教育活動の中で意識して取り組まなければならないことばかりだが、十分に推進できているとは言い難いのが現状である。そこに学校運営協議会がもつ機能を生かすという視点を加えることで課題解決につながった事例をたくさん御紹介いただいた。生徒を取り巻く学校・地域・家庭等の人材が連携して、学校課題と地域課題を解決していけるコミュニティづくりの一端を、教頭として担えるよう尽力していきたい。

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

徳島県小中学校教頭会 小松島市児安小学校 田邊 幸代

11月21日(金)、午前の部は「アーティスト 石村嘉成のキセキ」という演題で、嘉成氏本人とその父和徳氏との講演である。発達障がいとわかった2歳から、家庭と療育センターとで一貫した方針・目標を掲げて取り組んだ療育についての内容である。将来を見据えた「知識ある愛」をもって、御両親が取り組んできた日々の積み重ねが、現在の石村嘉成氏が版画に会うキセキへつながっていることを強く感じる。最後に版画印刷の実演もあり、力強いタッチの作品ができあがった。

午後からの第4分科会「組織・運営に関する調査」では、2つの提案発表と小グループに分かれての協議があった。徳島県からは「魅力ある学校づくりのための幼小連携」の発表があった。1年間を通して、①幼稚園職員との合同研修会、②幼児と児童の交流、③幼稚園保護者との座談会の実践内容と教頭としてのそれぞれの関わりについての多くの取組を提案された。年長児から1年生へスムーズにつなげるための「架け橋カリキュラム」を①～③の視点で行い、その成果は教職員間の関係性の構築や意識のアップデート、1年生への円滑な接続につながった。もう1つは愛媛県西条市教頭会の「『未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり』を目指した学校組織の運営と教職員のウェルビーイングの向上」の事例発表であった。風通しのよい職場環境づくりのために教頭としての取組として、働く意欲が向上するような言葉掛け、児童や保護者への対応には2名以上のチームで行うよう配慮する、教職員への月1回のアンケートを行い困り感に早急に対応できるように心掛ける等があった。特にチームとして児童に関わるために、専科や合同授業の工夫や全校教育相談体制の意識をもつように工夫していた。

後半はグループ協議を行った。各校のコミュニティースクールについて情報交換をした。ある学校では、地域コーディネーターが大きな役割を担い、様々な学校行事への参加協力の連絡調整をしていた。学校で何ができるのかを公募し、協力できる方の名簿を作成して、ラインの連絡をすると都合のつく方がやってきて業務をする仕組みであった。先進的なコミュニティースクールの取り組みの事例もあったが、なかなか進んでいない学校もあり、これからの大きな課題であると認識した。地域との関係性を構築した後、異動後も継続できるように可視化した引き継ぎの大切さが議論となった。

今大会では、参集型の良さと課題を感じた。グループ協議では対面し、互いの顔を見ながら協議することで、参加した充足感の高揚があった。しかし、多忙な教頭が丸1日の大会参加、移動時間も考えると勤務時間超過となり得る。参集型形式の大会の開催方法は働き方改革を推進する中での今後の課題であると考ええる。

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

徳島県小中学校教頭会 阿南市立大野小学校 山崎 寛子

まず、今大会の運営に携わってくださった、愛媛県の教頭会の皆様にお礼を申し上げたい。多忙な教頭業務をこなしながら、大会の準備を進めるのには想像以上の御苦勞があったと推察する。皆様のおかげで、貴重な学びの機会を得ることができたと思っている。

私は阿南市の発表分科会であった第4分科会に参加した。西条市教頭会の発表の中で、「働きがい」について触れられていたが、「働き方改革」＝「勤務時間短縮」という考え方に陥ってしまうことの危うさは以前から感じていて、「働きがい」の向上は今後、管理職として考えていかなければいけない重要なテーマだと感じた。グループ討議では普段なかなか交流のできない他県の、また校種の違う教頭先生方と話をすることができ、よい刺激になった。また、阿南市教頭会としては、今回の発表がよい機会となり、市の小学校全体で協力しながら幼小連携を一步進めることができたのでよかったと感じている。研究発表はたいへんであるが、実りも多い。多忙であっても、学ぶ姿勢、新しいことに取り組む姿勢は忘れないでいたいと思う。また、阿南市を代表して提言発表してくださった久龍和巳先生に、この場をお借りしてお礼を申し上げたい。

全体会講演の講師である石村嘉成さん、石村和徳さんに出会えたことは、今大会に参加してよかったと思う出来事の一つである。嘉成さんのことも、その作品についてもこれまで存じ上げなかったことを残念に思うほど、舞台上に並べられた絵の迫力にまず圧倒された。そして、父和徳さんのお話を拝聴し、改めて教育の大切さを痛感した。嘉成さんが、才能を発揮し、自分らしく生き生きと、まさにウェルビーイングな生き方をすることができているのは、御両親の教育の賜物であり、すばらしい教育者との出会いのおかげである。すべての子供に、嘉成さんのように、自分らしく輝ける大人になってほしい。私たち教員はその成長の過程にかかわる重要な存在であり、御両親の思いを支え励ます伴走者であることを自覚しなければならない。担任を離れ、教頭としての事務仕事が増え、直接子供に関わる時間が少なくなったことで、その自覚が薄れつつあったことを反省させられた。「しからない 怒鳴らない しかし 譲らないで教える」。親のみならず、多様な子供との関わり方に悩む若い教職員も実は多い。教頭として、校内の先生方のモデルとなるような子供への関わり方を示していけるよう、今後も様々な機会を得て、学び続けていきたいと思う。

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

高知県小中学校教頭会 南国市立日章小学校 溝渕 幸声

「いで湯と城と文学のまち」松山の地において、11月21日に開催された第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)に参加した。午前中の全大会講演の所感を述べさせていただくこととする。全体会講演では、生後2歳時検診で自閉症による発達障がいと診断されたのち、自立に向けて両親の深い愛情のもと育てられ、現在は、独創的な世界観で動物を描く作家として活躍されている石村嘉成さんとその父親である石村和徳さんの講演を拝聴した。

講演会では、父親の和徳さんから、嘉成さんが誕生してから自閉症と診断される前までの出来事や、新居浜のトモニ療育センターでの療育時代の様子、そして版画家として活躍するまでに至った経緯についてお話を伺った。私が父親の和徳さんのお話を聞く中で特に感銘を受けたことは、両親の療育に対する方針と目標である。それは、重度の自閉症と診断された嘉成さんに嫌がることをさせず、泣かさないようにただひたすら子どもの要求のままに過保護に育てるのではなく、嘉成さんが将来社会に出たときに、社会で受け入れられ、自分のことだけでなく、他人のことを考えて行動し、周りに感謝の念を持ち、人に嫌われず、何か自分の子どもしかない魅力を持った人間へと育ててほしいという信念を持っていた。亡くなられた母親とともに、この強い自覚をもって子育てを継続されてきたとのことである。また、和徳さんのお話のなかで、「譲らないで教える」「常にこちら側がリードする」「したくないことでもやる我慢」「やりたいことでもしない我慢」という言葉があった。我々が日々関わっている学校現場の全ての子どもたちに通ずる大切な考え方を教示していただいたと思う。

講演会の最後には、闘病のすえ、嘉成さんを残して天国へと旅立たれた母親の遺書を和徳さんが紹介してくれた。嘉成さんの将来の自立と我が子を思う親の深い愛情に満ちたメッセージに触れ心が震えた。その後、ステージ上では嘉成さんと和徳さんのサポートによる版画の実演が披露された。それまで会場にいる私たちへにこやかな笑顔を振りまいていた嘉成さんであったが、いざ実演にとりかかるやいなや、きりっとした表情に切り替わり、会場全体が凜とした空気に包まれていった。完成した作品を手にとり、私たちに披露してくれた自信に満ち溢れた嘉成さんの姿は、まさにアーティスト石村嘉成そのものであった。

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

高知県小中学校教頭会 高知市立一宮東小学校 水田 麻希

今回参加した第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)は、全国統一研究主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」(キーワード:自立・協働・創造)について考える貴重な機会となった。

午前の講演「アーティスト 石村嘉成のキセキ」では、嘉成氏の父である和徳氏から、発達障がいという「特性」をどのようにして「強み」に変えていくか、という視点が示され、子どもの行動の背景を理解し、誤学習を防ぐことの重要性が語られた。和徳氏の「母が変われば子どもが変わる」という言葉のとおり、親の成長が子どもの成長につながる。「受け入れられる力」「思いやり」「感謝の心」等が育まれる子どもになってほしいという話は、学校現場での指導にもつながるものであった。教育や子育てには「適切さ」「一貫性」「継続性」が不可欠であり、大人が逃避せずに向き合い続ける姿勢が、子どもが社会で自分らしく生きる力を支えるということを改めて認識した。

午後の特別課題「学校と地域の絆が子どもと地域の未来を創る」では、西日本豪雨の経験を踏まえた防災教育の意義について、元吉田中学校校長 西村久仁夫氏よりお話があった。子どもを「守られる存在」から「命を守る主体者」へと成長させることが防災教育の本質であるという指摘は非常に印象的だった。自分の安全を確保し、他者に役立つ行動を取ることが「人との絆」「自力解決」「感謝の心」へとつながること、そのためには学校と地域が協働することの大切さを実感した。防災教育は単なる知識の習得ではなく、子どもが社会の一員として主体的に行動する力を育む営みであるということが実際の映像等からも伝わってきた。

いずれも、子どもが主体的に生きる力を育む基盤であることを確認できた講演であった。教頭の立場として、学校経営に反映し、教職員・保護者・地域が一体となって子どもを支える体制を整えることが求められている。大人が理解し、向き合い、継続的に支援する姿勢が「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」につながる。学級経営の支援、保護者との連携強化、地域防災活動の推進等、具体的な場面で今回の学びを生かし、子どもたちが自立し、協働し、創造する力を育む教育実践を積み重ねていければと思う。

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

愛媛県小中学校教頭会 伊予市立下灘小学校 向井 一貴

「疲れたら愛媛」「いで湯と城と文学のまち松山」で開催された第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)に参加させていただいた。日々、「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」のために尽力されている先生方と意見交換や情報共有することで、自分を見つめ直す機会となり、教頭としての資質を高めることができた貴重な時間であった。

午前の講演「アーティスト 石村嘉成のキセキ～発達障がいのが子と歩んで～」では、講師の石村嘉成氏と、その御父様である石村和徳氏からお話を伺った。和徳氏の御子息の子育てのお話の中にあった「子供たちの育児と教育は【適切さ】と【一貫性】と【継続性】の全てが必要で、しかも【徹底して】行われたとき、効果が生まれる。」「将来を見据えた子育てをするには、【知識ある愛】を持って、時には厳しさも必要である。」という二つの言葉が強く印象に残った。子供の実態や環境等を把握し、将来を見据えた教育、生徒指導をはじめとした学校のルールの一貫と指導、教育効果の評価と改善に向けたPDCAサイクル。わたしたちが毎日出会う子供たち、そして、目の前にいる教員、どちらを育てるにも必要不可欠である。この言葉を胸に、教頭として高い志を持ち、未来を切り拓くたくましい子供たちや若手教員を育てていきたい。

午後の第ⅠA分科会「教育課程に関する課題」の研究課題では、香美市立香北中学校と伊方町立三崎小学校の実践報告を基に、地域の良さを生かした特色ある学校づくりについて、グループで意見交換をした。本市では、昨年度から全小中学校がコミュニティ・スクールを導入している。今回の各県や他市の取組を参考にし、今後、特色のある学校づくりに向けて、教頭として学校運営に積極的に関わり、働き掛け、課題解決に向けた協議の質を向上させるとともに、地域との日常的な連携を密に図りながら学校運営協議会を軌道に乗せ、充実させていきたい。そして、持続可能な取組となるように、コーディネーターとして推進役として尽力したい。

最後に本研究会を開催するにあたり企画・運営してくださった役員の先生方や関係者の皆様に心から感謝申し上げたい。そして、本研究大会を通して得たつながりや学びを大切に、今後の教育活動に真摯に取り組んでいく所存である。

「第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)」に参加して

愛媛県小中学校教頭会 今治市立日高小学校 中山 顕士

冒頭の記念講演では、石村嘉成さんと御家族の歩みを拝聴し、深い感動を覚えた。2歳で自閉症と診断されながらも、両親の愛情と粘り強い支援、療育センターでの適切な指導により、嘉成さんが力を発揮していく過程は、教育に携わる者として多くの示唆を得た。高校3年時の版画制作をきっかけに才能が開花し、国内外で高い評価を受けて活躍する姿は、児童生徒一人一人が持つ可能性の大きさを改めて感じさせてくれた。特に心を打たれたのは、父・石村和徳氏の覚悟と行動である。シングルファーザーとして仕事の激務と子育てを両立し、3年間無遅刻無欠席で自転車通学を共に続けたエピソードには、子供の成長を信じ寄り添い続ける強さを感じた。発達障がいのある子供への支援は、一朝一夕では実を結ばないが、周囲の理解と継続的な関わりがあれば、未来が大きく拓くということを実感した。

分科会は、第5分科会「教職員の専門性に関する課題」に参加した。高知市立江ノ口小学校の発表では、教員の年齢層の二極化や人材不足、長時間勤務など、どの学校にも共通する課題に真正面から向き合う姿勢が示されていた。特に、働き方改革を基盤とし、持続可能な学校運営体制を構築しようとする方向性に共感した。校内研修の活性化やミドルリーダー育成を通して協働体制を高める取組は、教職員の意欲や参画意識を高める上で大変有効であると感じた。教頭として、組織を効果的に動かすことの重要性を再認識した。また、上島町立岩城中学校の発表では、離島という特性を踏まえた地域と学校の連携の在り方を深く考えさせられた。家庭数減少やPTA負担の増大といった課題に対し、教頭として地域と教職員をつなぐ体制づくりが一層重要になると感じた。短期間での人事異動があったとしても、共通理解を基盤とした協働できる環境を整えることで、地域に根ざした学校づくりが進むのではないかと考えた。

グループ協議では、ミドルリーダーが若手に教師の楽しさややりがい語る取組が紹介され、印象に残った。また、企画会の裏でメンター会を開き、若手のニーズに応じた助言を行う仕組みや、早期退職防止につながる保護者対応の模擬演習など、実践的に若手を育てる取組が参考になった。

今後も引き続き、勤務校の実態に応じた「持続可能な学校運営体制」の構築に努めたい。

「愛媛大会」を終えて



愛媛大会実行委員長 玉井 真一

第43回四国地区小中学校教頭会研究大会（愛媛大会）・第64回愛媛県小中学校教頭会研究大会（松山大会）が11月21日（金）に松山市民会館を中心に松山市総合福祉センター、松山市男女共同参画推進センター、えひめ共済会館にて盛大に開催できましたことを、心よりお礼申し上げます。

本大会を開催するにあたり、御祝辞や御指導・御助言を賜りました愛媛県教育委員会、松山市、松山市教育委員会、愛媛県小中学校校長会をはじめとする関係諸機関、諸団体の皆様、研究実践報告をいただきました提言者の皆様、大会運営に格別の御支援・御協力をいただきました四国地区小中学校教頭会役員の皆様等多くの方々に御尽力をいただき、心より深く感謝申し上げます。

今回の愛媛大会は、愛媛県新居浜市在住のアーティスト石村嘉成氏・父親の石村和徳氏による記念講演でスタートしました。嘉成氏の版画作品をステージ上に展示し、力強く美しい作品を堪能しながら、父親和徳氏の講演をお聞きすることができました。嘉成氏の誕生から今日に至るまでの育児と教育の困難や将来を見据えた子育てをするために必要なことなど、教育に携わる者として大切なことを改めて考えさせられるよい機会となりました。また途中、ライブ・ドローイングの時間を設けていただき、会場の代表が版画作業の実演に参加させていただくなど、臨場感のある講演会となり、参加した皆様から好評をいただきました。

午後からの分科会では、松山市民会館をはじめ、4会場7分科会に分かれ五つの研究課題について提言者の発表を基に、参加者が各校の実践、成果や課題を各グループで熱く語り合いました。特別分科会では、コミスクえひめ代表理事の西村久仁夫氏の講演があり、これからの学校と地域について、災害時や部活動改革などでの連携の在り方をお話しいただきました。特に教育課程における特別活動の指導が日本人を育てているという内容については、私たちの日々の教育活動の積み重ねの重要さを感じました。提言者の皆様、指導助言の先生方、分科会の運営にあたっていただいた皆様、グループ協議の司会・記録にあたっていただいた皆様、ありがとうございました。

愛媛大会実行委員会としてこの大会の開催にあたり、教頭として日々の業務を行いながら、大会準備のため何度も話し合いを重ねてまいりました。その中で意見を交わし合い、よりよい大会に向けてチームとなって準備・運営し、開催できたことを大変うれしく思います。

この後、しっかりと大会を振り返り、成果と課題をまとめ、来年度の香川大会につないでいきたいと思っています。皆様、本当にありがとうございました。

「愛媛大会」を終えて



愛媛県小中学校教頭会 研究部長 久保 愛彦

木々が少しずつ色づき、景色に深みが出始めた令和7年11月21日に俳都松山の中心部にあります松山市民会館をメイン会場として、四国4県から625名の教頭が集まり、第43回 四国地区小中学校教頭会研究大会（愛媛大会）を実施することができました。

本年度は全国公立学校教頭会第13期の研究の最終年度であり、全国統一研究主題である「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」を四国地区各県の研究主題として、地域の実態に合わせて研究に取り組みました。

研究主題に設定した「未来を切り拓く力」とは、子供たちがこの予測困難な時代の進展・変化に対して、適切にかつ積極的に対応する力であり、自ら進んでよりよい社会や幸せな人生を築き上げていく力であると考え、研究を進めました。そして、学習指導要領前文の「よりよい学校教育を通して、よりよい社会を創る」という理念を受け、社会に開かれた教育課程の実現に向けて、教頭として「魅力ある学校づくり」に取り組まなければなりません。子供たちが笑顔で学校に通い、安心して教育を受けられることはもちろん、保護者や地域住民の方たちに信頼され魅力を感じていただける「開かれた学校づくり」を推進するとともに、教職員にとっても魅力ある学校であり、新しい時代に向けた持続可能な教育活動・学校運営体制を構築するため、学校における働き方改革の着実な具現化に取り組むことが重要と考え、四国地区各県が実践してきたことを今回の愛媛大会で御提言いただきました。

愛媛大会の各分科会では、「教育課程」「子供の発達」「教育環境整備」「組織・運営」「教職員の専門性」という五つの研究課題の中で、六つの分科会と特別分科会に分かれ、各県がそれぞれの地域で協働的に進めた貴重な研究の成果を御提言いただきました。そして、分科会ごとに小グループに分かれ、御提言を基に活発な意見交換がなされました。提言者や司会者、記録者も小グループに所属し、提言者と参加者のやり取りだけではなく、参加者全員が課題について考えることで、小中の垣根を超えた意見や情報を交換し、教頭先生方の横のつながりもより広がったのではないのでしょうか。

今後の研究にあたりましては、次期（第14期）研究の1年次として、継続性、協働性、関与性の三本柱を重視して推進していきたいと思いますので、御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、今大会の開催に当たり松山市小中学校教頭会の皆様には、校務御多用の中、細部にわたり心を尽くして運営をしていただきました。また、御後援や御指導、御助言をいただきました愛媛県教育委員会をはじめ、関係の皆様には心より感謝いたします。本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

次年度開催県挨拶

香川県小中学校教頭会 会長 佐藤 盛子

次年度開催地を代表いたしまして、一言御挨拶を申し上げます。

愛媛県にて、第43回四国地区小中学校教頭会研究大会（愛媛大会）、第64回愛媛県小中学校教頭会研究大会（松山大会）が盛大に開催されましたこと、心よりお祝い申し上げます。愛媛県小中学校教頭会の皆様方の熱意と御尽力により、実り多き学びと交流の場が築かれたことに、深く感謝いたします。大会を通じて得られる学びと交流は、今後の教育実践に大いに生かされることと思います。香川県小中学校教頭会一同、皆様の御努力に敬意を表するとともに、その成果を次年度大会へと継承すべく、準備を進めてまいります。第44回四国地区小中学校教頭会研究大会（香川大会）、令和8年度香川県小中学校教頭会研究大会は、令和8年11月26日（木）・27日（金）の2日間にわたって四国の玄関口サンポートで開催する予定です。

教育を取り巻く環境が日々変化する中、副校長・教頭としての使命と役割はますます重要性を増しております。子どもたちの未来を見据え、確かな理念と実践力、そして情熱をもって教育に向き合うことが求められています。次年度香川大会では、全公教第14期の研究の視点である「持続可能な社会の創り手の育成」「ウェルビーイングの向上」を踏まえ、これまで取り組んできた「つながりともに創る学校」の実現をさらに深化・充実させてまいります。つながりを大切にし、協働しながら未来に向かって共に歩むことが、一人ひとりのウェルビーイングを支え、大人も子どもも共に育つ学校づくりの実現を可能にしていきます。こうした理念を基に、互いに連携し、創造し、家庭・地域と共に伸びていく学校をめざし、講演や分科会を通じて、多角的な視点からの学びと交流をもとに、未来を担う子どもたちのために、私たち自身も共に成長したいと考えています。

本大会が、四国四県の教頭先生方の知見と経験を共有し、互いに学び合う貴重な機会となり、香川の地での再会が、皆様にとって実り多いものとなるよう香川県小中学校教頭会一同、心を尽くして参りたいと存じます。

香川県は、温暖な気候と豊かな自然、歴史と文化が息づく地です。御来県の際には、学びと交流に加え、香川ならではの魅力にも触れていただければ幸いです。皆様と香川の地でお会いできることを、心より楽しみにしております。どうか皆様の御理解と御協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。多くの先生方の御参加を期待いたしまして、次期開催県の挨拶とさせていただきます。

第43回 四国地区小中学校教頭会研究大会（愛媛大会） 第64回 愛媛県小中学校教頭会研究大会（松山大会）

実 行 委 員 会 組 織

大会長	愛媛県会長	佐伯 敬（久米小）
副大会長	香川県会長 徳島県会長 高知県会長	佐藤 盛子（高松市立弦打小） 中山 英治（徳島市城西中） 畠中 恒（高知市立泉野小）
大会実行委員長 副委員長		玉井 真一（道後小） 乗松 哲也（椿中） 立花 卓実（城西中） 高橋 芳文（宮前小）
県事務局	事務局長 事務局次長	谷川 大介（生石小） 松本 卓（小野中）

総 務 部	運 営 部	研 究 部	編 集 部
部 長 宮内 健作（北久米小） 副部長 松浦 英樹（北条北中） 係長 【庶務】 渡辺 哲也（垣生中） 【受付】 北川 雅士（勝山中） 【会計】 長井 正樹（姫山小） 【式典】 亀岡 修（高浜小） 【接待】 西河 珠実（東雲小） <県事務局> 事務局長 谷川 大介 事務局次長 松本 卓 経理部長 土井祥二郎 事務局員 二宮真由美	部 長 橋本 恵（南第二中） 副部長 北村 秀行（たちばな小） 係長 【会場】 菅野 真理（桑原小） 【運営】 河野 綾（石井東小） 【厚生】 藤原 和憲（興居島中） <県事務局> 対策部長 伊賀上知晴 副部長 有馬 知歩	部 長 森田 充彦（栗井小） 副部長 濱田 伸哉（久米中） 係長 【研究】 安倍 周作（湯築小） 【分科会】 檜垣 正（旭中） <県事務局> 研究部長 久保 愛彦 副部長 渡部 憲悟	部 長 武田 香織（内宮中） 副部長 濱村 圭右（味酒小） 係長 【要項】 岡田 行弘（湯山小） 【写真】 伊賀上 淳（南中） <県事務局> 広報部長 藤高 知子 副部長 二神 耕司
【実行】 ○実行委員会運営費の執行 ○来賓・役員接待 ○会場や講師との交渉 ○スタッフ名札の作成 ○資料袋のデザインと資料の袋詰め ○詳細なタイムテーブル ○会員や来賓受付 ○開閉会式の運営 ○救急時の対応確認 【県】 ○予算の確保と執行、決算報告 ○受付名簿の準備 ○大まかなタイムテーブルの作成 ○開閉会式の計画 ○来賓等の名札作成 ○四国理事会や全公教での経過・事後報告 ○関係団体等へのお礼 ○次期開催地への引継ぎ	【実行】 ○全体会・講演会・分科会での用具一式準備 ○分科会場での湯茶準備 ○各会場の設営（機材を含む）と運営 ○各種表示の作成と設置 ○必要弁当の手配 ○来賓駐車場の確保 【県】 ○全体会・講演会・分科会の準備・運営確認	【実行】 ○全体講演の計画・運営 ○特別分科会の計画・運営 ○講師との連絡・交渉 ○アンケートの実施・回収・集計・報告 ○二次案内の作成 【県】 ○分科会役員（提言、助言、司会、記録）の選定と連絡調整 ○分科会参加人数決定と各種名簿の作成 ○研究大会資料の作成 ○分科会小グループ分け	【実行】 ○資料袋のデザイン ○資料の袋詰め ○研究大会当日の記録（全体会・講演会・分科会） ○データ保存 ○編集・校正 【県】 ○「四国の教頭等」印刷物の編集と発行 ○全国教頭会報での報告 ○編集・校正

編集後記

振り返れば大会の日は、青空に城山公園の紅葉が美しく映えるころでした。四国各県より多くの先生方にお越しいただき、研究大会が開催されました。芸術の秋にふさわしい、すてきなアート作品に触れながらの石村様の講演や、提言者様はじめ、大会に御参加いただいた教頭先生方との熱心な協議により、学びの多い研修となりました。

このたび、関係の皆様にお世話になり、研究集録「四国の教頭」が完成いたしました。実践の成果や課題、協議の中で情報共有したことや御助言いただいたことを基に、編集されております。今後の各校での教育実践にお役立ていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、集録の発刊にご尽力いただきました多くの皆様に厚く御礼申し上げますとともに、皆様のますますの御活躍を御祈念申し上げます。

愛媛県小中学校教頭会 広報部

編集委員

佐 伯 敬	谷 川 大 介
松 本 卓	久 保 愛 彦
渡 部 憲 悟	藤 高 知 子
二 神 耕 司	伊賀上 知 晴
有 馬 知 歩	土 井 祥二郎
北 村 秀 行	武 田 香 織
二 宮 眞由美	

令和7年度

【研究集録】四 国 の 教 頭

第43回四国地区小中学校教頭会研究大会(愛媛大会)

第64回愛媛県小中学校教頭会研究大会(松山大会)

令和7年3月1日 発行

編 集 愛媛県小中学校教頭会

発 行 愛媛県小中学校教頭会

会 長 佐伯 敬

松山市祝谷町Ⅰ丁目5-33 エスポワール愛媛文教会館内

印 刷 アマノ印刷有限会社

松山市東石井Ⅰ丁目10-30 T E L (089)956-2442



会章のいわれ

“円”は教頭会のまとまり，協力，発展
“教”は教育の教と教頭の教
“8本の線”は全国8ブロックを意味し，
一定の秩序で遠近感を出し未来を表し，
中央部の段ちがいのアクセントは
教頭の自覚を促している。

●

デザイン

元 茨城県真壁町立桜川中学校教頭
塚本武治氏